

Sattvārādhana について

津田明雅

はじめに

Sattvārādhana とは Nāgārjuna に帰せられる11偈からなる作品であり、サンスクリットが一部残っているほか、チベット大蔵経に2訳存在する。また Nag dban dpal ldan による19世紀の注釈書もある。本稿はこれらの校訂テキストおよび日本語試訳の提示を主眼におく。

興味深いことに、作者は Nāgārjuna とされるものの、チベット訳の奥書きによれば本讃歌は *Kṣāranadī という経典を作者が偈頌の形でまとめたものとされ、サンスクリットの奥書きではこれは大乘経典だとされる。この点でこれは純粋な Nāgārjuna の著作とはいえず、むしろ大乘経典というブツダのことは伝える典籍であることになる。実際、その内容はブツダが人々(弟子たち)に語る形式で書かれている。

この *Kṣāranadī という不明な経典の解明は別稿に譲ることとし、ここではまず本讃歌および注釈書の内容の分析、Atiśa による引用文の検討の後、各テキストを挙げる。

1. *Sattvārādhana* について

本讃歌には *Sattvārādhana* として冒頭の欠けるサンスクリットがあるほか、チベット訳として *Sattvārādhana* (P no.2017) と *Sattvārādhana*gāthā (no.5429) が存在する。両チベット訳はほぼ一致し、同じテキストに基づいていると思われるが、サンスクリットとは完全には一致しない。

韻律はサンスクリットより、第3-6偈が Vasantatilakā¹ (音節数14×4)、第7-8偈が Śārdūlavikrīḍita² (19×4)、第9-11偈が Mandākrāntā³ (17×4) である。チベット訳では no.5429 が全偈ほぼ13×4音節、no.2017 は第1-5偈は13×4音節であるが残りは各句で2-6音節増えることがあり整っていない。第1、2偈の韻律の特定は難しい。

¹ Apte, V. Sh. (1957) Appendix, p.7.left 39-46.

² *ibid.* Appendix, p.9.left 39-46.

³ *ibid.* Appendix, p.8.right 4-11.

先行研究としてLévi、Pandey、Hartmann の各氏および筆者による、テキスト校訂ならびに内容の考察がある⁴。前3者は校訂サンスクリットに関するもので、筆者のものは2つのチベット訳の校訂が中心である。

Lévi氏はサンスクリット写本を入手し、冒頭の2偈と第3偈の一部は欠けるが、テキストを校訂し発表した。それをもとに、Pandey氏は欠ける部分をチベット訳(no.5429)より補って復元したという⁵サンスクリットを発表した。しかしながらこのテキストは、特にサンスクリットの欠ける部分に関してno.5429とあまり一致しないばかりかno.2017とも一致せず、残りの部分に関してLévi氏のサンスクリットと一致しない個所があり、第3偈cd句は他のいずれのテキストにも存在しない。それゆえ新たな写本を用いたと考えざるを得ないが、その手がかりはわずかに同氏が触れる「バナーラシー・ラール博士の個人コレクション」である。その中に“Sattvārāḍhanakārikā”があるという⁶。しかしその読みが掲載テキストに反映されているかどうかは明記されず、同コレクションあるいは当該写本についてのこれ以上の情報もない。

Hartmann氏は上記2つの校訂本を利用したサンスクリットを提示した。氏はPandey氏の読みを採用している個所が多いが、Pandey氏のテキストが根拠とするものが不明な現段階では、その読みを採ることには慎重にならざるをえない。したがって本稿では、Lévi氏のテキストを底本とし、必要に応じてPandey氏あるいはHartmann氏の読みを採用した。偈頌の数え方はチベット訳に沿ったものである。

テキスト自体に関しては、サンスクリットの第6偈は2句しかない。2つのチベット訳では4句あり、それらは両者でほぼ一致しており同一テキストと考えられるが、これらのうちcd句にサンスクリットに対応するものがないのである。また、サンスクリット、チベット訳いずれにも共通するが、全体として読みにくい、あるいは意味不明な個所が多く、特に第10, 11偈は意味がとりにくい。これは筆者の能

⁴ Lévi, S. (1929), Pandey, J. Sh. (1992), Hartmann, J.-U. (2007), 津田明雅(2006) pp.300-301, 306, 337-342, 374-378.

⁵ Pandey, J. Sh. (1992) p.1.5-8: isameṃ prārambh ke 3 pady nahīm the, saubhāgy se bhāratīy paṇḍit Buddhākara-varmā, anuvāḍak bhikṣu Dharmajña dvārā kiyā huā isakā tibbatī anuvāḍ prāpt ho gayā / (Preliminary three stanzas of the above verse were not available. Fortunately, Tibetan translation of the verse by Indian Paṇḍit Buddhākara-varma and Tibetan translator Bikṣu Dharmajña was found available[.] by which three preliminary stanzas were restored and could [be] able to present here the complete verse.)

⁶ *ibid.* p.1.3-5: is gāthā ko Jarnal Eśiyāṭik (J.A.) Aktū.-Dis. 1929, pr.264-265, meṃ śrī Silvām Levī ne Sattvārāḍhanakārikā śīrṣak se prakāśit kiyā thā, jise **Dr. Banārasī Lāl ne upane saṃgrah** meṃ rakhā thā / (The Sattvārāḍhāra Gāthā, which is found in the private collection of Dr. Banārasī Lāl, was published in Journal Asiatique pp.264-265, Oct.-Dec, 1929, by S. Lévi.) Banārasī Lāl氏はPandey, J. Sh. (1992) 所収の雑誌 *Dhīṭh* の編集者の一人である。

力不足に起因するところも大きいですが、Hartmann 氏も同様に述べる⁷ところをみると、テキスト自体にまだ改善の余地があるのかもしれない。

内容的には「慈悲(karuṇā, krpā: sñiñ rje)」、「供養(pūjā: gus pa, mchod pa)」、「傷つける(himsā, hinasti, parābhava, apakāra, viheṭhanam, viheṭhayati, viheṭhita: gnod pa, 'tshē ba)」といった語がキーワードとして挙げられ、利他を強調した非常に大乘的な内容である。

2. 注釈書について

本讃歌には注釈書が存在する⁸。作者はÑag dbaṅ dpal ldan(1797-1864) というモンゴル人であり、ゲルク派の僧である。奥書きによれば、1850 年1 月にある寺院(モンゴル名 Khu khen hu thog thu'i khu re (Hüühen khutagtin hüree)、チベット名 Dam chos 'gyur med gliñ) で、人に会わない修行(bsñen mtshams) をした際に著したという。この寺院はモンゴルにあったチベット仏教の寺院である⁹。作者は当時52 歳であった。

注釈の形態は「割注」というもので、偈頌本文の間に少し小さい文字で、あるいは点線で示して注釈を施していくという体裁をとる。本文の語句を丁寧に解説していく一方、必要に応じて *Bodhicittavivarāṇa*、*Bodhisattvacaryāvatāra*、*Svapnacintāmaṇi-parikathā* といった論書を引用する。さとりを求める心(菩提心) を生じるまでの因果関係を示した「7つの因果の口伝」に言及するなど、随所にツォンカパの影響がみられる。

注釈中に明記されるように、チベット大蔵経に訳出されたものを底本に用いている。先に触れた P no.2017 の方を底本とし、必要に応じて no.5429 を用いている。

⁷ Hartmann, J.-U. (2007) p.252.11-26.

⁸ Gurudeva, Mongolian Lama (1983). Quarcoo, Ph. (2007) に校訂テキストとドイツ語訳があり、また注釈書作者の自伝のドイツ語訳も掲載される。本修士論文入手にあたっては加納和雄氏および Jowita Kramer 氏に大変お世話になった。Quarcoo 氏本人からは先の自伝の英訳草稿と Tsedendamba, S. (2009) の一部をお送りいただいた。注釈が執筆された寺院の特定は Quarcoo, Ph. (2007) ではなされていなかったが、筆者とのやり取りの中で Quarcoo 氏が同定された。氏の功績を特筆しておきたい。山口周子氏にも寺院の特定に尽力いただき、Quarcoo 氏とともにモンゴル語に関して貴重なご教示をいただいた。これらの方々に厚く御礼申し上げる。ただし誤り等あれば、すべて筆者に帰することはいうまでもない。

⁹ この寺院は Uрга (現在のウランバートル) の東に隣接する Setsen Khan aimag の Mergen Gün khoshuu(現在の Khentii aimag の Ömnödelger sümüm) にある Bayandelger 山の南麓に1704 年に建立されたが、現存しない。次の解説書では'sajiin yosunii hiid' といわれ、これは「サキヤ派の寺院」を意味すると思われる: Tsedendamba, S. (2009) p.794, no.95; Jerryson, M. K. (2007) Fig.1, 2(before the introduction). Khu khen hu thog thu (フーヘン・ホトクト, Hüühen Khutagt) については: Tsedendamba, S. (2009) p.144.24-41.

3. Atiśa による引用部分について

本讃歌のチベット訳P no.2017 の翻訳者であるAtiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna) は、その著作*Ratnakaraṇḍodghāta-nāma-madhyamakopadeśa*(『中観優波提舍開宝篋』, P no.5325, MU と略) において、**Kṣāranadī*という経典からとして以下のように引用する。

Ba tshva chu kluñ gi mdo las ji skad du /
chuñ ma rnams dañ bu tsha rgyal srid dbañ phyug chen po dañ //
śa rnams dañ ni khrag dañ tshil dañ lus dañ mig /
pha rol dga' ba'i dbañ du byas nas űas ni gtañ ba yin //
gañ gi sems can rnams la phan na űa la mchod mchog yin //
sems can rnams la gnod pa byas na űa la gnod pa byas //
*zes bya ba la sogs pa ślo ka bcu gcig gsuñs so //*¹⁰

『塩の河』という経典に次のように、

妻たちや息子 [たちや] 王国 [や] 権威 [や] 偉大さや肉や血や骨髓や身体や眼を、他 [のものたち] の喜びを第一に考え、私は捨てよう。命あるものたちに利益をなすならば [それは] 私に対する最高の供養である。命あるものたちを傷つけるならば [それは] 私を傷つける [ことに等しい]。などと、11 偈が説かれている。

Atiśa はここで典拠として経典名を挙げているが、実際は*Sattvārāadhanagāthā* から引用しているといえる。その理由は、まずこの引用個所で最後に「11 偈」という記述があること、また他の個所で次のような記述があり、これらはいずれもNāgārjuna による*Sattvārāadhanagāthā* を指すに他ならないからである。

slop dpon **Klu sgrub** kyis mdzad pa'i *sMon lam űi śu pa dañ / Ba tshva chu kluñ nas byuñ ba'i tshigs su bcad pa bcu gcig pa* la sogs pas sems can mi gtoñ bar bya'o //¹¹
師であるNāgārjuna がお作りになった『誓願二十頌』と『塩の河から生じた11偈』などによって、命あるものを捨てないようにしなければならない。

¹⁰ 宮崎泉(2007) pp.38.24-39.6, 96.14-19.

¹¹ *ibid.* pp.25.4-6, 87.4-6.

slob dpon 'phags pa **Klu sgrub** kyis **Ba tshva chu kluñ nas phyuñ ba'i Sems can**
mgü bar bya ba'i tshigs su bcad par yañ gsuñs so // theg pa chen po'i mdo sde gžan
las kyañ gsuñs so //¹²

師である聖なるNāgārjuna によって、『塩の河から抜き出された命あるものを
喜ばせる偈頌』にも説かれている。[また] 他の大乗経典にも説かれている。

しかしながら、この引用文に関しては不可解な点がいくつもある。まず、この部
分は本讃歌のサンスクリットと必ずしも一致しないばかりか、Atiśa 自身による翻
訳(P no.2017) やno.5429 とも一致しない。Atiśa 訳でいえばこの引用部分は5abc,
6ab に相当し、5d は欠ける。さらに5c に当たる個所のpha rol や6a に当たる個所
のgañ gi はサンスクリットとも2 つのチベット訳(nos.2017, 5429) とも一致しない。
5a のrgyal sridとdbañ phyug の順序もサンスクリットとも2つのチベット訳とも逆
である。5b のlusとmig はサンスクリットともno.2017 と順序が逆であるが、
no.5429 とは一致する。奇妙なことに、訳文自体に関しては彼自身の翻訳よりも
no.5429 と一致する部分が多いといえる。そもそもタイトル自体、no.2017 の-stava
ではなくno.5429 の-gāthā と一致する。また引用部分の音節数は5b に当たるとこ
ろだけ11 で、それ以外は13 であるのも不思議である。2つのチベット訳ではすべ
て1句につき13 音節である。

Atiśa がこの引用個所の翻訳で自身の訳文(no.2017) をそのまま用いていないと
いうことは、no.2017 の翻訳以前にMU の翻訳を完了していたということだろうか。

MU はもともとインドで著された後¹³、Atiśa 本人とrGya brTson 'grus señ ge と
Tshul khriṃs rgyal ba によってチベット訳されたものである。川越英真氏は「訳者
の一人にAtiśa らの一行とチベットへ向かう途中にネパールで死んだといわれる
rGya も加わっているため、少なくともチベットでの訳出は否定される。おそらく
インドで翻訳されたものであろう」とする¹⁴。一方、13 世紀に編纂されたAtiśa 伝
であるrNam thar rgyas pa にはチベットで*Sattvārādhana が翻訳されたという記述

¹² *ibid.* pp.42.13-15, 98.24-25.

¹³ 奥書きに Vikramaśīla 寺で著されたとある: 宮崎泉(2007) p.69.17-20. ただしテキストの読みを、
「当寺院でかの Dīpaṃkaraśrījñāna によって著された」ととらず、「当寺院ですぐれた師たちによ
って説かれた通りに」ととれば、必ずしもインドで著されたとはいえない。

¹⁴ 川越英真(2001) p.305.18-20. 川越氏の見解にもかかわらず、rNam thar rgyas pa のいう'mag ñag
che chuñ gñis' 「大小2 つの口伝」(Eimer, H. (1979) p.280.28) の一方が MU を指すとしても、それ
は次にみる*Sattvārādhana の翻訳以前の出来事として記述されており、本稿での以下の記述と矛盾
することはない。

があり、それはno.2017 を指すと考えられる¹⁵。したがって、MU が翻訳された後にno.2017 が翻訳された可能性が高いのであるが、もしそうであれば、先の仮説は正しいことになる。

ただ、これほどまでのテキストの違いはどのように説明されるべきだろうか。MU にテキスト伝承上の混乱があったのか、あるいはMU の翻訳者にrGya brtson 'grus señ ge が加わっているということが、no.2017 とのテキストおよび翻訳の違いに何らかの影響を及ぼしたのだろうか。あるいはそうではなくて、両書ともにAtiśa が責任をもって翻訳し、その時点ですでにこのような違いがあったのであれば、Atiśa は、本讃歌のテキストが手元にありながら、MU での引用時にはあえて*Kṣāranadī の原文を参照したのであろうか。

no.5429 との一致に関しては、no.5429 の訳者たちがMU の引用部分の翻訳を参照した結果とみることもできよう。no.5429 の翻訳者とAtiśa は同時代人であり¹⁶、その可能性がないともいえない。さらにいえば、もしそうであれば、no.5429 の訳者たちがMU を知っていてno.2017 を知らないというのは考えにくく、no.5429 の後にno.2017が訳出されたのかもしれない。

いずれにせよ、MU で引用された本讃歌のテキストが混乱している理由について、現時点では明確な結論を出せない。

参考文献

Apte, V. Sh. (1957) *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, Poona, reprint Rinsen Book Company, Kyoto, 1978.

Brunnhölzl, K. (2007) *In Praise of Dharmadhātu: Nāgārjuna and the Third Karmapa, Rangjung Dorje*, Ithaca, New York; Boulder, Colorado; USA, pp.313-315.

Eimer, H. (1979) *rNam Thar rGyas Pa, Materialien zu einer Biographie des Atiśa (Dīpaṅkaraśrījñāna)*, 2, Asiatische Forschungen, 67, Wiesbaden.

Gurudeva, Mongolian Lama (1983) *The Collected Works of Chos rje Ņag dbañ dpal ldan*

¹⁵ Eimer, H. (1979) p.318.11-12. それによれば bla ma ñid と lo tsā ba の2人によって‘Sems can mgu bar bya ba’が翻訳されたというのが、両翻訳者はAtiśa と Tshul khriṃs rgyal ba と考えてよいだろう。それゆえ、このテキストは no.2017 であると思われる。ただし、*Sattvārādhana* にはこの異訳(no.5429)の他に密教部に同名の著作(P no.3626)があり、それは著者、翻訳者ともに不明であるので、*rNam thar rgyas pa* の指すものがこちらである可能性が完全に否定されるわけではない。なお、これは密教的なテキストで、内容的には本稿で扱うものと無関係である。本書の存在は宮崎泉氏にご指摘いただいた。氏には、MU に関連して貴重なご教示を多くいただいたこととあわせ、ここに感謝したい。

¹⁶ Hartmann, J.-U. (2007) pp.248.13-249.2. no.5429 の翻訳者はBuddhākaravarman と Chos kyi śes rab.

- of Urga, Reproduced from clear prints of the Urga blocks, vol.7 (ja), Delhi.*
- Hartmann, J.-U. (2007) “Der Sattvārādhanaśtava und das Kṣāranadīsūtra”, *Pramāṇakīrtiḥ, Papers Dedicated to Ernst Steinkellner on the Occasion of his 70th Birthday*, part 1, Wien, pp.247-257.
- Jerryson, M. K. (2007) *Mongolian Buddhism, The Rise and Fall of the Sangha*, Chian Mai, Thailand.
- 川越英真(2001)「Nag tsho Lo tsā ba について」, 『東北福祉大学研究紀要』, 25, pp.293-316.
- Lévi, S. (1929) “Autour d'Aśvagoṣa”, *Journal Asiatique*, 215, pp.253-285.
- 宮崎泉(2007) 「『中観優波提舍開宝篋』テキスト・訳注」, 『京都大学文学部研究紀要』, 46, pp.1-126.
- Pandey, J. Sh. (1992) “Sattvārādhana-gāthā”, *Dhīh*, 14, pp.1-2. (Digital text: www.uwest.edu/sanskritcanon, *Bauddha Stotra Samgrah*, Varanasi, 1994, Stotra section, no.100, last modified at 5 Nov. 2008. The text revised at 1 Jul. 2010 is the same one.)
- Quarcoo, Ph. (2007) *Nachrichten zum Leben des mongolischen Gelehrten Ngag-dbang dpal-ldan und zu seinem Kommentarwerk Sems can mgu bar bya ba'i tshigs su bcad pa mchan dang bcas pa*, Hausarbeit zur Erlangung des Magistergrades an der Ludwig-Maximilians-Universität München.
- 酒井真典(1988)「菩提心離相論考」, 『成田山仏教研究所紀要』, 11, 仏教思想史論集, 1, pp.89-139.
- ツルティム・ケサン, 小谷信千代(1991) 『仏教瑜伽行思想の研究』, 文英堂, 京都.
- Tsultrim Kelsang Khangkar (2001) *The Great Treatise on the Stages of the Path to Enlightenment(Lam Rim Chen Mo)*, Japanese and Tibetan Buddhist Culture Series, 6, Kyoto.
- ツルティム・ケサン, 藤仲孝司(2005) 『チベット仏教の原典『菩提道次第論』悟りへの階段』, 星雲社, 東京.
- Tsedendamba, S. (2009) *Mongolin Süm Hiidiin Tüühen Tobchoon*, Ulaanbaatar.
- 津田明雅(2006) 『Catuḥstava とナーガールジュナー諸著作の真偽性』, 博士論文, 京都大学.
- Vaidya, P. L. (1960) *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati*, Buddhist Sanskrit Texts, 12, Darbhanga.

Sattvārādhana

[sattvôpa-]kāram adhikṛtya gato 'smi siddhim
sattvārtham eva tanum eṣa samudvahāmi /
sattvān hinasti manasâpi hi yaḥ sa kasmān
mām eva saṃśrayati yo mayi nirvyapekṣaḥ // 3
pūjā tu sâ bhavati sattva-hitêkṣaṇâpi
pūjyasya yā manasi tuṣṭim upādadaṭi /
hiṃsâtmikā para-viheṭhana-sambhavā vā
pūjā na pūjyam anugacchati saṃskṛtâpi // 4
dārāḥ sutās ca vibhavaś¹⁷ ca mahattva-rājyam¹⁸
māṃsāni¹⁹ śoṇita-vase²⁰ nayane śarīram /
yeṣāṃ priyatvam adhikṛtya mayôjjhitāni²¹
yas tān viheṭhayati tena viheṭhito 'ham // 5
sattvôpakāra-paramā hi mamâgra-pūjā
sattvâpakāra-paramaś²² ca parābhavaḥ syāt / 6
sattvān prāpya mayā kṛtāni kuśalāny ārādhitās tāyinaḥ
prāptāḥ pāramitās ca sattva-samiter evārtham ātiṣṭhatā /
sattvārthena samudyatena manasā mārasya bhagnaṃ balaṃ
sattvair eva tathā tathā viracitaṃ yenâsmi buddhaḥ kṛtaḥ // 7
kasmin vastuni sidhyatām iha kṛpā maitrī ca kvālambyatām²³
kvôpekṣā-muditādi-vastu-viṣayāḥ²⁴ kasmin vimokṣādayaḥ /
kasyârthe karuṇā-pareṇa manasā²⁵ kṣāntiś ciraṃ bhāvitā
na syur janmani janmani priya-vidhau mitraṃ yadi prāṇinaḥ // 8
sattvā eva gajādi-bhāva-gatayo dattā mayânekaśaḥ

¹⁷ vibhavaś Pandey: Pandey, J.Sh.(1992); Hartmann: Hartmann, J.-U. (2007) / vibhavaś Lévi: Lévi, S. (1929)

¹⁸ mahattva-rājyam Lévi / mahattva[cca] rājyam Pandey / mahac ca rājyam Hartmann

¹⁹ māṃsāni Lévi / māṃsaṃ ca Pandey, Hartmann

²⁰ -vase Lévi, Pandey / -vaśe Hartmann

²¹ -ojjhitāni Lévi, Hartmann / -ojjhitam yad Pandey

²² -paramaś Lévi / -parayā Pandey, Hartmann

²³ -ālambyatām Lévi / -ālambatām Pandey, Hartmann

²⁴ kvôpekṣā-muditā- ... -viṣayāḥ Hartmann / kopekṣā-[m]uditā- ... -viṣayāḥ Lévi / kvôpekṣā-muditā-... -viṣayaḥ Pandey

²⁵ manasā Lévi, Hartmann / manasaḥ Pandey

sattvā eva ca pātratām upagatā²⁶ deyaṃ mayā grāhitāḥ /
sattvair eva vicitra-bhāva-gamanād asmat-kṛpā vardhitā
sattvān eva na²⁷ pālayāmi yadi cet kasyārtham arthaḥ kṛtaḥ // 9
saṃsāre vyasanābhipāta-bahule²⁸ na syur yadi prāṇino
janmāvarta-vidambanena yama-lokaṃ prāpya sātmikṛtāḥ /
saṃsārāt taraṇaṃ ca saugatam idaṃ mähātmyam atyadbhutaṃ
kasyārthena samīhitaṃ yadi na me sattvā bhaveyuḥ priyāḥ // 10
yāvaca cēdaṃ jvalati jagataḥ śāsanam śāsanam me
tāvat stheyam parahita-parair ātmavadbhir bhavadbhiḥ /
śrutvā śrutvā²⁹ mama vicaritaṃ sattva-hetor akhinnaiḥ
khedaḥ kāryo na ca tanum imāṃ mukta-sārāṃ³⁰ bhavadbhiḥ // 11

samyak-sambuddha-bhāṣitaṃ Sattvārādhanaṃ nāma mahā-yāna-sūtrāntaṃ samāptam //³¹

3. 命あるものを助けることに関して、私は[その]達成へと向かう。まさに命あるもののためにこの私は身体を[世間に]現す。じつに命あるものたちを心によってさえも傷つける者が、どうして他ならぬ私に頼るだろうか。[そういう者は]私に対しては無関心である。

4. そして、供養を受ける者の心に満足を与える、そうした供養は、命あるものの利益を考えたものでもある。傷つけるという本性をもち、あるいは他のものの苦しみを生んで[おいて]、作為的な供養をしたとしても、[その供養は]供養を受ける者には伴わない。

5. 妻たち、息子たち、諸々の富、大王国、肉、血と骨髄、両眼、身体—[それらは]愛しいものであるが—[それら]に関しては、私は捨て去っている。[しかし]それらを傷つける者によって、私は傷つけられる。

6. 実に、命あるものを助けることを最高とするのが、私にとって最高の供養である。命あるものを傷つけることを最高とするのが、[私にとって最高の]軽蔑で

²⁶ upagatā Lévi, Hartmann / upagataṃ Pandey

²⁷ na Pandey, Hartmann / om. Lévi

²⁸ -abhipāta- Lévi / -abhighāta- Pandey, Hartmann

²⁹ śrutvā Pandey, Hartmann / śrutvā ca Lévi

³⁰ imāṃ mukta-sārāṃ Hartmann / imāṃ ukta-sārāṃ Lévi / imam ukta-sāraṃ Pandey / imam mukta-sāraṃ Pandey(1994)

³¹ : Lévi / samyak-sambuddha-bhāṣitā Sattvārādhanaḡāthā samāptā / Pandey(1994) / iti samyak-sambuddha-bhāṣita-Sattvārādhanaḡāthā samāptā // Pandey

あろう。

7. [私が] 命あるものたち [のもと] に到ってから、私によって諸々の善がなされ、守護者たちがなだめられた。まさに命あるものの集まりのために用いられるもの(ātiṣṭhatā) である諸々の完成(六波羅蜜) に、[私は] 到ったのである。命あるもののために、万全の心で魔天の力を打ち砕いたのである。まさに命あるものたちによってこれこれだと作り出されるそのことによって、私はさとった者(buddha) とされているのである。

8. どんなものにおいて、この[世間] で、慈悲(kṛpā) と慈愛(maitrī) が確立されようか。[それらが] どこで拠り所とされようか。どこに平常心(upekṣā) や喜び(muditā)などということの対象が[あろうか]。どこに解脱などが[あろうか]。誰のために、慈悲(karuṇā) を最高としてもった心が、長い間忍耐(kṣānti) を生じるのか。もし、次々に生まれることが愛しいあり方である時、生き物たちが友(mitram) でないのならば。

9. 他ならぬ命あるものたちや象などの生き物(bhāva-gati) たちは、私によって何度も恵みを受けた。また、他ならぬ命あるものたちは[それなりの] 能力に到[れば]、私によって贈り物がとらされる。他ならぬ命あるものたちはさまざまな[輪廻的] 存在に向かうので、私の慈悲は増す。もし、他ならぬ命あるものたちを私が見守らないならば、何のために利益がなされるのか。

10. 消滅したり移動したりすることを伴う輪廻において、もし生き物たちが、生まれの回転(輪廻) を非難することによって、ヤマの世界に到って[その世界に] 慣れ親しんでしまうということがないのであれば、輪廻からのこの克服は、仏教的であり偉大なものであり非常に驚くべきことである。もし私にとって命あるものたちが愛しいものでないなら、何のために[それが] 願われるのか。

11. そして、この世間の教えが燃える限り、私の教えは、他を利益することを高とした自制の利くあなた方[菩薩] によって、とどめられる。[そうしたあなた方は] 私の[布教のための] 流浪を何度も聴いて、命あるもののために疲れることはない。あなた方によって、疲れが作り出されることはなく、この(私の) 身体はその中核が解放されたもの[となる]。

正しくさとった方が説かれた、『命あるものを喜ばせる』と名付けられる大乘経典を終わる。

Sattvārāḍhanastava (P no.2017)

(P ka1, 86a8) (N ka82b4) (C ka85a3) (S ka106a5)

Sems can mgu bar bya ba'i bstod pa ||³² (N82b5)
(D ka74b3) rgya gar skad du³³ | Sattvārāḍhanastava³⁴ |
bod skad du³⁵ |(P86b1) Sems can mgu^(C85a4) bar bya ba'i bstod pa |
'Jam dpal dbyaṅs la phyag 'tshal lo³⁶ ||

ña la gus pa sems can don te gus pa gžan^(D74b4) (S106a6) dag min ||
gañ gis sñiñ rje ma btañ de yis ña la gus pa ste ||^(P86b2)
sñiñ rje btañ^(N82b6) nas gnas par gyur pa lhuñ ba gañ^(C85a5) yin pa ||
de ni de las sñiñ rjes bsłañ bar nus kyi gžan gyis min || 1

gañ gi³⁷ sñiñ rje sems can la ni rjes su³⁸ žugs gyur pa ||
des ni ña yañ^(S106b1) mñes byas des ni^(P86b3) bstan pa'i^(D74b5) khur yañ bzuñ ||
tshul khirms thos pa sñiñ^(C85a6) rje^(N82b7) dag dañ blo dañ gsal ba dag |
gañ la yod pa des ni rtag tu bde bar gśegs pa mchod || 2

ña ñid sems can phan 'dogs gyur pas grub 'di brñes pa^(P86b4) ste ||³⁹
sems can⁴⁰ kho na'i don du^(S106b2) ña yis sku 'di yañ dag bzuñ ||⁴¹ (C85a7)
sems can rnam^(D74b6) la yid kyi^(N83a1) gnod par sems de gañ gi phyir ||⁴²
ña la mi bltos⁴³ pas na de yi⁴⁴ don ston par mi 'gyur⁴⁵ ||⁴⁶ 3

³² || Cone(C) / | Peking(P) / | || Golden manuscript(gSer-bris, S) / Derge(D) omits this line.

³³ skad du P, D, Narthang(N), C / skadu S

³⁴ sattvārāḍhanastava *ego* / satvārādānastaba P, N / satvārādānastapa S / satvārādānastabaṃ D / satvārādānastaba C

³⁵ skad du P, D, N, C / skadu S

³⁶ phyag 'tshal lo P, D, C / phyag 'tshalo N / 'phyag 'tshalo S

³⁷ gi P, N, C, S / gis D

³⁸ rjes su P, D, C / rjesu N, S

³⁹ [sattvōpa-(*ego*)]kāram adhikṛtya gato 'smi siddhim: Lévi, S. (1929) p.264.3. *The underlined Sanskrit corresponds to the Tibetan.

⁴⁰ sems can P, D, N, C / semñ S

⁴¹ sattvārtham eva tanum eṣa samudvahāmi: *ibid.* p.264.4.

⁴² sattvān hinasī manasāpī hi yah sa kasmān: *ibid.* p.264.5.

⁴³ bltos P, N, C, S / ltos D

⁴⁴ de yi P, N, C, S: considering the number of syllables. / de'i D

⁴⁵ 'gyur P, N, C, S / 'gyur ro D

⁴⁶ mām eva saṃśrayati yo mayī nirvyapeksah: *ibid.* p.264.6.

sems can^(P86b5) phan pa chuñ yañ des ni mchod pa 'byuñ 'gyur te ||⁴⁷
gañ gis yid ni mgu bar byed pa^(S106b3) mchod^(C85b1) pa yin pas so⁴⁸ ||⁴⁹
gnod^(N83a2) pa'i bdag ñid can nam gžan la rnam par 'tše 'añ⁵⁰ (D74b7) ruñ ||⁵¹
legs par sbyañ⁵² nas^(P86b6) mchod par gyur kyañ des ni mchod mi 'gyur ||⁵³ 4

chuñ ma dag dañ bu dañ 'byor dañ rgyal srid chen po dañ ||⁵⁴
śa rnams dañ ni khrag dañ tshil dañ^(C85b2) (S106b4) mig dañ lus rnams^(N83a3) kyañ ||⁵⁵
gañ la brtse ba'i dbañ du⁵⁶ byas nas ña yis⁵⁷ (P86b7) yoñs btañ ba ||⁵⁸
des na de la gnod pa byas^(D75a1) na ña la gnod byas 'gyur ||⁵⁹ 60 5

des na sems can phan pa byas na ña la mchod pa'i mchog ||⁶¹
sems can gnod pa byas pa ña la śin tu^(C85b3) (S106b5) gnod pa'i mchog ||⁶²
bde dañ^(P86b8) (N83a4) sdug bsñal ña dañ sems can⁶³ mtshuñs par myoñ bas na ||⁶⁴
sems can rnams la 'tše bar byed de ña yi slob ma ji^(D75a2) ltar yin ||⁶⁵ 6

sems can rnams la brten nas sañs rgyas mñes⁶⁶ dañ dge ba byas ||⁶⁷ 68
sems can⁶⁹ (P87a1) (C85b4) mañ po'i don la rab gnas^(S106b6) pha rol phyin^(N83a5) pa thob ||⁷⁰

⁴⁷ pūjā tu sā bhavati sattva-hitêkṣanâpi: *ibid.* p.264.7.

⁴⁸ pas so P, C, D / paso N, S

⁴⁹ pūjyasya yā manasi tustim upādādāti: *ibid.* p.264.8.

⁵⁰ 'tše 'añ P, N, C, S / 'tše ba'añ D

⁵¹ himsātmikā para-vihethana-sambhavā vā: *ibid.* p.264.9.

⁵² sbyañ P / sbyar D, N, C, S

⁵³ pūjā na pūjyam anugacchati samskr̥tāpi: *ibid.* p.264.10.

⁵⁴ dārāh sutāś ca vibhavāś ca mahattva-rājyam: *ibid.* p.264.11.

⁵⁵ māmsāni śoṇita-vase nayane śarīram: *ibid.* p.264.12.

⁵⁶ du P, D, N, S / ru C

⁵⁷ yis D / yi P, N, C, S

⁵⁸ yesām priyatvam adhikr̥tya mayōjjhitāni: *ibid.* p.264.13.

⁵⁹ || P, D, S / om. N, C

⁶⁰ yas tān vihethayati tena vihethito 'ham: *ibid.* p.264.14.

⁶¹ sattvōpakāra-paramā hi mamāgra-pūjā: *ibid.* p.264.15.

⁶² sattvāpakāra-paramaś ca parābhavaḥ syāt: *ibid.* p.264.16.

⁶³ sems can P, D, N, C / semñ S

⁶⁴ om.: *ibid.*

⁶⁵ om.: *ibid.*

⁶⁶ mñes P, D, C, S / mñis N

⁶⁷ || D, N, C, S / | P

⁶⁸ sattvān prāpya mayā krtāni kuśalāny ārādhitās tāyinaḥ: *ibid.* p.264.17.

⁶⁹ sems can P, D, N, C / semñ S

⁷⁰ prāptāḥ pāramitāś ca sattva-samiter evārtham ātisthatā: *ibid.* p.264.18.

sems can don la brtson pa'i yid⁷¹ kyis bdud kyis stobs kyañ bcom⁷² ||⁷³
sems can⁷⁴ rnam la de lta de ltar spyad pa des na ña sañs^(P87a2) rgyas ||⁷⁵ (D75a3) 7

skye ba skye bar gces par gyur pa'i gñen 'dra srog^(C85b5) chags med gyur na ||⁷⁶
dños po gañ la 'dir^(N83a6) ni sñiñ rje byams las^(S107a1) dmigs pa ñes par 'grub ||⁷⁷
btañ sñoms dga' ba la sogs dños po'i^(P87a3) yul dañ rnam par thar la sogs gañ la ||⁷⁸
gañ gi don du sñiñ rje de la 'bad pa'i yid^(D75a4) kyis^(C85b6) bzod pa yun riñ⁷⁹ bsgoms⁸⁰ ||⁸¹
8

glañ po la sogs 'gro ba^(N83a7) sems can rnam ñid du⁸² ma ña^(S107a2) yis sbyin pa byas ||⁸³
(P87a4)

sems can⁸⁴ rnam ñid snod ñid du⁸⁵ yañ ñe bar gyur pas ña yis sbyin pas bsdu ||⁸⁶
sems can rnam ñid sna tshogs dños^(C85b7) por gyur pas ña yi⁸⁷ sñiñ rje 'phel^(D75a5) bar gyur
||⁸⁸
gal te sems can^(P87a5) rnam^(N83b1) ñid bsruñ ma byas na gañ gi don du don^(S107a3) 'di bsgrubs
||⁸⁹ 9

gal te sems can med na 'khor bar ñon moñs mi bzad rab tu mañ po las ||⁹⁰
skye ba brgyud par gnod^(C86a1) pa mtshuñs pa med las gañ la^(P87a6) brten nas phan 'di
bsgrubs ||⁹¹

⁷¹ yid P, D, N, C / yiñ S

⁷² bcom P, D, N, C / bcom S

⁷³ sattvārthena samudyatena manasā mārasya bhagnam balam: *ibid.* p.264.19.

⁷⁴ sems can P, D, N, C / semñ S

⁷⁵ sattvair eva tathā tathā viracitam yenāsmi buddhah kṛtaḥ : *ibid.* p.264.20.

⁷⁶ na syur janmani janmani priya-vidhau mitram yadi prāninaḥ: *ibid.* p.264.24.

⁷⁷ kasmin vastuni sidhyatām iha kṛpā mairī ca kvālambyatām: *ibid.* p.264.21.

⁷⁸ kōpeksā-[m]luditādi-vastu-visayāḥ kasmin vimokṣādavah: *ibid.* p.264.22.

⁷⁹ riñ C / riñs P, D, N, S

⁸⁰ bsgoms P, D, N, C / bsgoms S

⁸¹ kasvārthe karuṇā-pareṇa manasā ksāntīś ciram(sic) bhāvītā: *ibid.* p.264.23.

⁸² ñid du P, D, C / ñidu N, S

⁸³ sattvā eva gajādi-bhāva-gatayo dattā mayānekaśaḥ: *ibid.* p.264.25.

⁸⁴ sems can P, D, N, C / semñ S

⁸⁵ ñid du P, D, C / ñidu N, S

⁸⁶ sattvā eva ca pātratām upagatā devam(sic) mayā grāhitāḥ: *ibid.* p.264.26.

⁸⁷ yi D / yis P, N, C, S

⁸⁸ sattvair eva vicitra-bhāva-gamanād asmat-kṛpā vardhitā: *ibid.* p.264.27.

⁸⁹ sattvān eva pālayāmi yadi cet kasvārtham arthah kṛtaḥ: *ibid.* p.264.28.

⁹⁰ samsāre vyasanābhīpāta-bahule na syur yadi prānino: *ibid.* p.264.29.

⁹¹ janmāvarta-vidambanena yama-lokam prāpya sātmiḥkṛtāḥ: *ibid.* p.264.30.

bde bar gśegs⁹² kyi^(D75a6) bdag^(N83b2) ñid chen po ño mtshar che ba 'khor ba'i^(S107a4) rgyan gyur 'di ||⁹³
gal te ña la sems can rnams la brtse med gyur na^(C86a2) gañ gi don du ñe bar bsgrubs ||⁹⁴
(P87a7) 10

ji srid ña yi bstan pa 'gro ba rnams la phan pa 'dir ni 'bar gyur pa ||⁹⁵
de srid gźan la mchog tu phan par^(N83b3) 'dod pa khyed kyis gnas par^(D75a7) gyis ||⁹⁶
thos^(S107a5) pas ña yi⁹⁷ legs par spyad pa sems can^(C86a3) don la mi skyo^(P87a8) thos bgyid la ||⁹⁸
skyo ba med par lus 'di las ni sñiñ po dag ni blañ bar gyis ||⁹⁹ 11

byañ chub sems dpa'i sde snod Ba¹⁰⁰ tshva'i chu kluñ zes bya ba'i luñ las
bcom^(N83b4) ldan 'das¹⁰¹ kyis ñan thos chen po bcu drug la^(S107a6) bka' stsal pa |^{(P87b1) (D75b1)}
(C86a4)

Sems can¹⁰² mgu bar bya ba'i bstod pa
slob dpon Klu sgrub kyis tshigs su¹⁰³ bcad pa'i sgo nas bsdus pa rdzogs so¹⁰⁴ || ||
rgya gar gyi mkhan po pañḍita¹⁰⁵ chen po Dīpaṃkaraśrījñāna^(N83b5) dañ¹⁰⁶ lo tsā ba dge
sloñ Tshul khriṃs^(P87b2) rgyal bas bsgyur ciñ žus te^(C86a5) gtan la phab pa'o || ||

⁹² gśegs P, D, N, C / gśed S

⁹³ samsārāt taraṇaṃ ca saugatam idam(sic) mähātmyam atyadbhutam: *ibid.* p.264.31.

⁹⁴ kasyārthena samīhitam yadi na me sattvā bhaveyuh priyāḥ: *ibid.* p.264.32.

⁹⁵ yāvaca cēdam jvalati jagataḥ śāsanam śāsanam me: *ibid.* p.264.33.

⁹⁶ tāvata stheyam(sic) para-hita-parair ātma-vadbhir bhavadbhiḥ: *ibid.* p.264.34.

⁹⁷ yi P, N, C, S / yis D

⁹⁸ śrutvā śrutvā ca mama vicaritam sattva-hetor akhinnaiḥ: *ibid.* p.265.1.

⁹⁹ khedah kārya na ca tanum imām ukta-sārām(sic) bhavadbhiḥ: *ibid.* p.265.2.

¹⁰⁰ ba D, N, C, S / pa P

¹⁰¹ bcom ldan 'das P, D, N, C / bcomdas S

¹⁰² sems can P, D, N, C / semn S

¹⁰³ tshigs su P, D, C / tshigsu N, S

¹⁰⁴ rdzogs so P, D, C / rdzogso N, S

¹⁰⁵ pañḍita P, N, C, S / om. D

¹⁰⁶ dañ P / dañ | D, N, C, S

『有情了悦讚(命あるものを喜ばせる讃歌)』

インド語でSattvārādhanaṣṭava、チベット語で『命あるものを喜ばせる讃歌』。
マンジュシュリー(Mañjuśrī) に礼拝します。

1. 私に対する敬意は命あるものの利益 [になるの] であって、他の [どんな] 敬意でもない。慈悲を投げ出さない者によって、私に対して敬意が払われる。慈悲を投げ出してとどまってしまう堕ちた者、その者は、そこから慈悲によって [救い] 上げられるけれど、他の [どんなこと] によってでもない。

2. その人の慈悲が命あるものに結びついているような、その人によって私もまた喜ばせられ、その人によって教えの重荷もまた捉えられる。徳性や学問や慈悲や、また知恵や明晰さといった諸々がその人にあるような、そうした人によって常に善逝は供養される。

3. 私は命あるものを利益すること(*upakāra) によって、この達成へと(siddhim) 向かった(gataḥ)。まさに命あるもののために(sattvārtham) 私はこの身体を(tanum) 現したのである。命あるものたちを心によって(manasā) 傷つける(hinasti)、そのような者がどうして [いるのか]。私に依存しない(nirvyapekṣaḥ) からであり、 [そうである] ならば、 [私は] その者の利益を説くことはない。

4. 命あるものへの利益が小さいものであっても(*iṣad-āpi)、それによって [仏への] 供養(pūjā) が生じる。それによって心を満足させる(manasi tuṣṭim) のが供養であるから。傷つけるという本性をもち(hiṃsātmika-)、あるいは他のものを傷つけて(para-viheṭhana-) [おいて]、作弄的な供養をした(saṃskṛtā pūjā) としても、それは供養することにはならない。

5. 妻たち(dārāḥ)、息子 [たち] (sutāḥ)、富(vibhavaḥ)、大王国(mahattva-rājyam)、肉(māmsāni)、血と骨髄(śoṇita-vase)、 [両] 眼(nayane)、身体(śarīram) — [それらに人々は] 執着する— [がそれら] に関しては、私は捨て去った。それゆえ、それ [ら] を傷つける(viheṭhayati) ならば、私が傷つけられる(viheṭhitāḥ) ことになる。

6. それゆえ、命あるものに利益をなすならば、私に対する供養は最大である。命あるものを傷つける(apakāra-) [ならば]、私に対する軽蔑(parābhavaḥ) は最大である。幸せと苦しみを私と命あるものは同じように感じるのだから、命あるものたちを傷つける('tshe bar byed) 者がどうして私の弟子であろうか。

7. 命あるものたちに依存して、 [私によって諸] 仏(tāyinaḥ) が喜ばれ(ārādhitāḥ)

善(kuśalāni) がなされた(kṛtāni)。多くの命あるもののためにある(ātiṣṭhatā) 彼岸への到達(pāramitāḥ) を得た。命あるもののために努力する心によって(samudyatena manasā)、魔天の力(mārasya balam) をも制圧した(bhagnam)。命あるものたちに対してこれこれを実行する、それによって私はさとった者(buddhaḥ) である。

8. 次々に生まれるのが愛しくなる場所の生き物(prāṇināḥ) が、友(mitram) のような[ものとして]存在しないのなら、どんなものにおいて(vastuni)、この[世間]で慈悲(kṛpā) や慈愛(maitrī) が拠り所とされたり(ālambyatām) 確立されたり(sidhyatām) でしょうか。平常心(upekṣā-) や喜び(muditā-) などといったものの対象(vastu-viṣayāḥ)や、解脱(vimokṣa-) などがどこに[あろうか]。何のために(kasyārthe)、そうした慈悲(karuṇā-) に努力する心が(manasā) 忍耐(kṣāntiḥ) を長い間生じるのか。

9. 象などの生き物(bhāva-gatayāḥ) や他ならぬ命あるものたち(sattvāḥ) は何度も私によって贈り物がなされた(dattāḥ)。他ならぬ命あるものたちは[それなりの]能力に(pātratām) 到れば私によって贈り物が(deyam) 取らされる。他ならぬ命あるものたちはさまざまな存在(vicitra-bhāva-) に向かうために、私の慈悲は増す。もし、他ならぬ命あるものたちを[私が]見守らないならば、何のためにこの利益(arthaḥ) がなされるのか。

10. もし生命(prāṇināḥ) が存在しないならば、輪廻においては苦しみ(vyasana-) や耐え難いこと(mi bzaḍ) が多いことから生まれの回転(janmāvarta-, 輪廻) において傷つくこと(gnod pa) [があるけれど、それ]は同様に存在しないから、何に依ってこのような利益がなされようか。善逝の偉大な性質でありたいへん驚くべきものである、輪廻の莊嚴(飾り) がこれである。もし私の中で命あるものたちに対して愛しいということ(priyāḥ) がないならば、何のために[彼らに]近づくのか。

11. 私の教え(śāsanam) が世界の万象のために(jagataḥ) この[世間]で燃える限り、他人に対して最高の利益を願うあなた[方]によって[教えは]とどめられる。[教えを]聴いて、私の善い行いが命あるもののために疲れることなく(akhinnaiḥ) 聴かされる。疲れること(khedāḥ) なく、この身体(tanum) から[教えの]中核(sārām) となる諸々を得なさい。

菩薩藏『塩の河』という經典から、世尊が16人の大声聞(Mahāśrāvaka) たちにお話しになった、『命あるものたちを喜ばせる讃歌』という、師 Nāgārjuna が偈頌の形でまとめられたものを終わる。インドの大学者 Dīpaṃkaraśrījñāna と翻訳僧 Tshul khriṃs rgyal ba によって翻訳され修正されて、確立された。

Sattvārāadhanagāthā (P no.5429)

(*P gi150b4*) *Sems can mgu bar bya ba'i tshigs su bcad pa* bźugs so¹⁰⁷ (*P150b5*) ||¹⁰⁸
(*N gi140b1*) (*S gi176b5*) rgya gar skad du |¹⁰⁹ (*N140b2*) Sattvārāadhanagāthā¹¹⁰ |
bod skad du | Sems can mgu bar bya ba'i tshigs su¹¹¹ (*S176b6*) bcad pa |
sañs rgyas dañ byañ chub sems dpa' thams cad la phyag¹¹² 'tshal lo¹¹³ ||

sems can don^(P150b6) ñid ña la gus yin gźan dag gus min la ||
gus pa'añ ña yi de la^(N140b3) sñiñ rje mi spoñ ba yin te ||
sñiñ rje spañs pa'i^(S177a1) spyod pas dman par¹¹⁴ gyur pa gañ yin la ||
sñiñ rje ñid kyis de la gnod par rigs kyis gźan gyis^(P150b7) min || 1

gañ źig sems can rñams la sñiñ rje ldan pas rab 'jug na ||
des ni ña la mchod^(N140b4) ciñ^(S177a2) bstan la gces par rab¹¹⁵ tu gzuñ ||
gañ la tshul khriims thos dañ sñiñ rjes blo gros gsal yod pa ||
de ltar^(P150b8) des ni bde bar gśegs pa rtag tu mchod par gyur pa¹¹⁶ yin || 2

sems can phan pa'i dbañ¹¹⁷ du byas nas ñas^(S177a3) 'di bsgrubs^(N140b5) pa ste ||¹¹⁸
sku 'di sems can don ñid kho nar kun nas bskyed pa la ||¹¹⁹
gañ źig yid kyis kyañ ni^(P151a1) sems can dag la gnod byed pa ||¹²⁰
de ni ji ltar ña la brten te ña la bltos bral yin ||¹²¹ 3

gañ gis yid la dga' ba^(S177a4) bskyed na¹²² mchod pa yin^(N140b6) pas na ||¹²³

¹⁰⁷ bźugs so *ego* / bźugso P

¹⁰⁸ N and S omit this line.

¹⁰⁹ | P, S / om. N

¹¹⁰ sattvārādhana- *ego* / satvaradhana- N / satvāradhanya- S / satvādhadhanya- P

¹¹¹ tshigs su P, N / tshigsu S

¹¹² phyag P, S / om. N

¹¹³ 'tshal lo P, N / 'tshalo S

¹¹⁴ par P, S / bar N

¹¹⁵ rab P, N / ra S

¹¹⁶ pa N, S / ba P

¹¹⁷ dbañ P, N / rañ dbañ S

¹¹⁸ [sattvōpa-(ego)]kāram adhikrtya gato 'smi siddhim: Lévi, S. (1929) p.264.3. *The underlined Sanskrit corresponds to the Tibetan.

¹¹⁹ sattvārtham eva tanum eṣa samudvahāmi: *ibid.* p.264.4.

¹²⁰ sattvān hinasī manasāpi hi yaḥ: *ibid.* p.264.5.

¹²¹ sa kasmān mām eva samśrayatī yo mayi nirvyapeksah: *ibid.* p.264.5-6.

sems can dag la phan na de ni chuñ yañ^(P151a2) mchod pa yin ||¹²⁴
'tshe ba'i bdag ñid can dañ gźan la gnod pa 'byuñ ba yi ||¹²⁵
mchod pa legs par sbyar ba yin yañ mchod par 'gyur ma yin ||^{126 (S177a5)} 4

chuñ ma rnams dañ bu dañ^(N140b7) dbañ phyug rgyal srid chen po dañ ||¹²⁷
śa^(P151a3) rnams dañ ni khrag dañ tshil dañ lus rnams dañ ni mig ||¹²⁸
gañ rnams kho na dga' ba'i dbañ byas ña yis btañ ba ste ||¹²⁹
gañ žig de la 'tshe na de ni ña la^(S177a6) gnod pa yin ||¹³⁰ 5

sems can rnams la^(N141a1) mchog tu phan na ña la^(P151a4) mchod mchog yin ||¹³¹
sems can rnams la gnod pa'i mchog ni ña la gnod mchog yin ||¹³²
ña dañ sems can dag ni bde dañ sdug bsñal mtshuñs 'dod¹³³ pas ||^{134 (S177b1)}
gañ žig sems can^(N141a2) gnod byed de ni ña la ji ltar^(P151a5) mos ||¹³⁵ 6

sems can bsten nas ña yis skyob pa mñes dañ dge ba byas ||¹³⁶
sems can dag la brten nas don bsgrubs pha rol phyin pa'añ thob ||¹³⁷
sems can don la yid^(S177b2) la brtson pa skyed nas bdud^(N141a3) btul te ||¹³⁸
de bžin^(P151a6) sems can ñid spyod gañ yin pa yis ña sañs rgyas ||¹³⁹ 7

gal te skye dañ skye bar srog chags dga' ba'i grogs min na ||¹⁴⁰
gañ 'di byams dañ sñiñ rjes su la dmigs^(S177b3) pa'i gźi las skyes ||¹⁴¹

¹²² na P, N / nas S

¹²³ pūjyasya yā manasi tustim upādātī : *ibid.* p.264.8.

¹²⁴ pūjā tu sā bhavati sattva-hitēkṣaṇāpi : *ibid.* p.264.7.

¹²⁵ himsātmikā para-vihethana-sambhavā vā : *ibid.* p.264.9.

¹²⁶ pūjā na pūjyam anugacchati samskr̥tāpi : *ibid.* p.264.10.

¹²⁷ dārāh sutās ca vibhavās ca mahattva-rājyam : *ibid.* p.264.11.

¹²⁸ māmsāni śonita-vase nayane śarīram : *ibid.* p.264.12.

¹²⁹ yeśām priyatvam adhikṛtya mayōjjhitāni : *ibid.* p.264.13.

¹³⁰ yas tām vihethayati tena vihethito 'ham : *ibid.* p.264.14.

¹³¹ sattvōpakāra-paramā hi mamāgra-pūjā : *ibid.* p.264.15.

¹³² sattvāpakāra-paramās ca parābhavaḥ syāt : *ibid.* p.264.16.

¹³³ 'dod N, S / 'doñ P

¹³⁴ om. : *ibid.*

¹³⁵ om. : *ibid.*

¹³⁶ sattvān prāpya mayā kṛtāni kuśalāny ārādhitās tāyinaḥ : *ibid.* p.246.17.

¹³⁷ prāptāḥ pāramitās ca sattva-samiter evārtham ātiṣṭhatā : *ibid.* p.264.18.

¹³⁸ sattvārthena samudyatena manasā mārasya bhagnam balam : *ibid.* p.264.19.

¹³⁹ sattvair eva tathā tathā viracitam venāsmi buddhaḥ kṛtaḥ : *ibid.* p.264.20.

¹⁴⁰ na syur janmani janmani priya-vidhau mitram yadi prāninaḥ : *ibid.* p.264.24.

rnam thar dga' sogs^{(P151a7) (N141a4)} su la bltos śiñ yul dañ gzi gañ yin ||¹⁴²
su yi don du riñ nas ña yi yid kyis śñiñ rje bsgoms¹⁴³ ||¹⁴⁴ 8

ñas ni srog chags ñid ni glañ sogs dños gyur du ma byin ||¹⁴⁵ (S177b4)
sems can ñid ni snod du gyur pas ña yis¹⁴⁶ sbyin pa blañs ||¹⁴⁷ (P151a8)
sems can^(N141a5) sna tshogs rgud gyur pa las ña yi śñiñ rjes 'phel ||¹⁴⁸
gal te sems can mi skyoñ su yi don du bsgrub par bya ||¹⁴⁹ 9

gal te srog chags 'khor^(S177b5) bar sdug bsñal du mas bcom min na ||¹⁵⁰
skye ba len ciñ sdug bsñal^(P151b1) ñams med su phyir^(N141a6) bdag gir byed ||¹⁵¹
bdag ñid chen po 'khor ba'i rgyan gyis bde bar gśegs pa 'di ||¹⁵²
gal te sems can dag 'phyir^(S177b6) min na ña la 'di su'i phyir bsgrubs ||¹⁵³ 10

ña yi bstan pa ji srid 'gro ba 'di na gsal^(P151b2) snañ ba¹⁵⁴ ||¹⁵⁵
de srid gzan la^(N141a7) mchog phan bdag gzan mñam par gnas par gyis ||¹⁵⁶
ña yi sems can don du rab mñam skyo med^(S178a1) sbyor rnams la ||¹⁵⁷
skyo bar byed¹⁵⁸ pa'i lus 'di zas kyis gsos kyañ śñiñ po med ||¹⁵⁹ (P151b3) 11

Ba tshva'i chu kluñ zes bya ba'i mdo las 'byuñ^(N141b1) ba || Sems can mgu bar¹⁶⁰ bya ba'i
tshigs su¹⁶¹ bcad pa bcu gcig pa^(S178a2) slob dpon 'phags pa Klu sgrub kyis phyuñ ba rdzogs

¹⁴¹ kasmin vastuni sidhyatām iha krpā maitrī ca kvālambyatām: *ibid.* p.264.21.

¹⁴² kopēksā-[m]uditādi-vastu-visayāḥ kasmin vimokśādayaḥ: *ibid.* p.264.22.

¹⁴³ bsgoms P, S / bsgomo S N

¹⁴⁴ kasyārthe karuṇā-pareṇa manasā kṣāntiś cīram(sic) bhāvitā: *ibid.* p.264.23.

¹⁴⁵ sattvā eva gajādi-bhāva-gatayo dattā mayānekaśaḥ: *ibid.* p.264.25.

¹⁴⁶ yis *ego* / yi P, N, S

¹⁴⁷ sattvā eva ca pātratām upagatā devam(sic) mayā grāhitāḥ: *ibid.* p.264.26.

¹⁴⁸ sattvair eva vicitra-bhāva-gamanād asmat-krpā vardhitā: *ibid.* p.264.27.

¹⁴⁹ sattvān eva pālayāmi yadi cet kasyārtham arthaḥ krtāḥ: *ibid.* p.264.28.

¹⁵⁰ samsāre vyasanābhipāta-bahule na syur yadi prānino: *ibid.* p.264.29.

¹⁵¹ janmāvarta-vidambanena yama-lokam prāpya sātmiḥkrtāḥ: *ibid.* p.264.30.

¹⁵² samsārāt taraṇam ca saugatam idam(sic) mātmyam atyadbhutam: *ibid.* p.264.31.

¹⁵³ kasyārthena samāhitam yadi na me sattvā bhavevuḥ priyāḥ: *ibid.* p.264.32.

¹⁵⁴ ba P, S / pa N

¹⁵⁵ yāvac cēdam jvalati jagataḥ śāsanam śāsanam me: *ibid.* p.264.33.

¹⁵⁶ tāvat stheyam(sic) para-hita-parair ātma-vadbhir bhavadbhiḥ: *ibid.* p.264.34.

¹⁵⁷ śrutvā śrutvā ca maṃa vicaritam sattva-hetor akhinnaiḥ: *ibid.* p.265.1.

¹⁵⁸ byed N, S / phyed P

¹⁵⁹ khedah kāryo na ca tanum imām ukta-sārām(sic) bhavadbhiḥ: *ibid.* p.265.2.

¹⁶⁰ bar P, S / par N

¹⁶¹ tshigs su P, N / tshigsu S

so¹⁶² || ||

rgya gar gyi mkhan po Buddhākara-^(P151b4)varman¹⁶³ dan | źus chen gyi lo tsā ba dge sloi
Chos kyi śes rab kyi bsgyur^(S178a3) ciñ źus^(N141b2) te gtan la phab pa'o || ||

『有情知足頌(命あるものを喜ばせる偈頌)』が収められる。

インド語でSattvārāghanagāthā、チベット語で『命あるものを喜ばせる偈頌』。
あらゆる仏と菩薩に礼拝します。

1. 命あるものの利益は私への敬意 [から生じるの] であり、他の [どんな] 敬意 [から] でもない。敬意もまた私にとって [のものであり] その者に対して慈悲を投げ出さない。[その者は] 慈悲を投げ出した行為によって貶められたとしても、まさに慈悲によって、その者を傷つける...他のことによってではない。

2. ある人が命あるものたちに対して慈悲をもって現れるならば、その人によって私に対する供養と教えに対する親しみが捉えられる。[その人に] 徳性や学問や慈悲や明晰な知恵がある、そのような、その人によって善逝は常に供養される。

3. 命あるものを利益することに関して、私はこれを達成(siddhim) した。この身体(tanum) をまさに命あるもののために(sattvārtham) 現したけれど、心によって (manasā) さえ命あるものたちを傷つける(hinasti) ような、その者がどうして私に依存しようか。[その者は] 私に対しては無関心である(nirvyapekṣah) [はずである]。

4. それによって心に喜び(manasi tuṣṭim) を生じるならば供養であるから、命あるものたちに対して利益がなされる(sattva-hitā) ならば、それは小さくても(*īśad-api) 供養(pūjā) である。傷つけるという本性をもち(hiṃsātmika-)、また他のものに苦しみを生じて(para-viheṭhana-sambhava-) [おいて]、作為的な供養をした(saṃskṛtā pūjā) としても、供養となることはない。

5. 妻たち(dārāḥ)、息子[たち](sutāḥ)、権力、大王国(mahattva-rājyam)、肉(māṃsāni)、血と骨髓(śoṇita-vase)、身体(śarīram)、[両] 眼(nayane) — [それらは] 愛しいものであるが— [それら] に関しては、私は捨て去った。[しかし] それ [ら] を傷つける(viheṭhayati) 者は、私を傷つける(viheṭhitah)。

6. 命あるものたちへ最高に利益(upakāra-) をなすならば、私に対する供養(pūjā)

¹⁶² rdzogs so P, N / rdzogso S

¹⁶³ buddhākara varman ego / buddhākara barma P, N, S

は最高である。命あるものたちを傷つけること(apakāra-) が最大である [とき]、私に対する軽蔑(parābhavaḥ) は最大である。私と命あるものたちは幸せと苦しみを同じように考えるのだから、命あるものを傷つける者は、私に対してどのように望むのだろう。

7. 命あるものに依存して、私によって守護者たちが喜ばれ(tāyinaḥ ārādhitāḥ) 善がなされた(kuśalāni kṛtāni)。命あるものたちに(sattva-samiteḥ) 依存して、目的を(artham) 達成する彼岸への到達(pāramitāḥ) を得た。命あるもののために心に努力を生じて、魔天を制圧した(bhagnam)。このようだとまさに命あるもの [によって] 作り出される、そういうことのために、私はさとった者(buddhaḥ) である。

8. もし次々に生まれた愛しい(priya-) 生き物たち(prāṇinaḥ) が友(mitram) でないならば、この [世間] で慈愛(maitrī) や慈悲(kṛpā) が誰において拠り所とされ(kvālambyatām) て?、どんなものから(gaṇ gṛhi las, kasmin vastuni) 生じようか(sidhyatām)。解脱(vimokṣa-) や喜び(muditā-) などは誰において見られる(ikṣa-) のか、事物や対象(vastu-viśayāḥ) とは何なのか。誰のために(kasyārthe)、長い間、私の心が(manasā) 慈悲(karuṇā-) を生じるのか¹⁶⁴。

9. 私によって、他ならぬ命あるもの [たち] や象などの生き物(bhāva-gatayaḥ) は何度も恵み(dattāḥ) を受けた。他ならぬ命あるもの [たち] は [それなりの] 能力に(pātratām) なることによって、私によって贈り物が(deyam) 取らされる。命あるもの [たち] は様々な境涯(rgyud, *gati) へと向かうために、私の慈悲(kṛpā) が増す。もし、命あるものたちを [私が] 見守らないならば、誰のために(kasyārtham) [利益が] なされるだろう。

10. もし生命あるもの(prāṇinaḥ) が輪廻において、多くの苦しみ(vyasana-) によって制圧されていないならば、生まれ(janma-) を獲得して [も] 苦しみや中傷(ñams) がない [のだから] 誰のために [そういう] 性質をもったもの(sātmīkṛtāḥ) になるのか。偉大な自我とは輪廻の飾りによるこの善逝である。もし命あるものたちが [愛しいもので?] ないならば、私においてこれが誰のために達成されるのか。

11. 私の教え(śāsanam) が世界の万象 [のために] (jagataḥ) この [世間] で燃える限り、他人に対して最高の利益を自他に等しく立てなさい。私にとっては命あるもののために等しく疲れることはない(akhinnaiḥ) [が]、執着する者たちに対して、疲れた行為(khedāḥ kāryaḥ) のこの身体(tanum) は食べ物によって養われるけれど、

¹⁶⁴ この bcd 句は現存サンスクリットの忠実な翻訳とはいえず、テキストが異なっていたか、さもなければ誤訳と言わざるを得ない。

中核は(sārām) ない。

『塩の河』という経典から生まれた [ものである] 『命あるものたちを喜ばせる偈頌』の11 [偈] が、師である聖なる Nāgārjuna によって抜き出されたものを終わる。インドの学者 Buddhākaravarman と校訂主任の翻訳僧 Chos kyi śes rab によって翻訳され修正されて、確立された。

Sems can mgu bar bya ba'i thigs su bcad pa mchan dañ bcas pa

(1a) *Sems can mgu bar bya ba'i thigs su bcad pa mchan dañ bcas pa* bźugs so || ||(1b1) ||

namo guruvai¹⁶⁵ |

sems can kun la bu gcig ltar brtse ba'i ||

sañs rgyas sras dañ bcas la phyag byas te ||

Sems can mgu bar bya ba'i tshigs bcad kyi ||

tshig don (1b2) ji bźin mtshan gyis dbye bar bya ||

[1] de yañ sañs rgyas bcom ldan 'das **ña la gus pas** mchod par 'dod pa rnam **sems can** gyi **don** byed dgos **te** sems can la byams pas phan btags (1b3) pa ni ña'i thugs mgu bar byed pa'i mchog yin pa ltar | zañ ziñ dbul ba la sogs pa'i **gus pa gźan dag** ni de ltar **min** || pa'i phyir ro ||

gañ zag **gañ gis** sems can la **sñiñ rje ma btañ** ba (1b4) **de yis** bcom ldan 'das **ña la gus pas** mchod pa byed pa'i mchog **ste** || de ni ña'i thugs mgu bar byed pa'i mchog yin pa'i phyir ro ||

sñiñ rje lhag bsam **btañ nas** źi mtha' la (1b5) **gnas par gyur pa** dañ theg pa dman par **ltuñ ba gañ yin pa** ||

de ni dman par **ltuñ ba de las sñiñ rje** lhag bsam gyis **bslañ bar nus kyi** thabs **gźan gyis** bslañ bar nus pa (2a1) **min** || te | ma ni śes rab pha ni thabs || [d?]es bdag med rtogs

¹⁶⁵ -vai ego / -wai sic

pa'i blo sogs śes rab kyi cha rnams theg pa gsum ka'i thun moñ ba yin pa'i phyir ro ||

[2] gañ zag **gañ gi** (2a2) **sñiñ rje sems can** rnams **la ni rjes su źugs** par **gyur pa**¹⁶⁶ ||

des ni bcom ldan 'das **ña yañ mñes** par **byas śiñ** | gañ zag **des ni** sañs rgyas kyi **bstan pa'i khur** (2a3) chen po **yañ** yoñs su **bzuñ** || ba yin te | sañs rgyas kyis sems can rnams ches śiñ tu gces par 'dzin pa dañ | sañs rgyas kyi bstan pa ni sñiñ rjes rab tu phye źiñ sñiñ rje'i rtsa ba can yin pa'i phyir ro ||(2a4)

tshul khrims dag pa dañ mañ du **thos pa** dañ **sñiñ rje** bskyed pa **dag dañ** gsuñ rab kyi tshig don rtogs dka' ba rnams la 'jug pa'i **blo** zab pa **dañ** chos rnams kyi cha śas phra źiñ phra ba rnams (2a5) 'byed nus pa'i śes rab **gsal ba dag** |

gañ zag **gañ gi** rgyud **la yod pa des ni** dus **rtag tu bde bar gśegs pa** rnams **mchod** | pa¹⁶⁷ yin te | sañs rgyas rnams ni (2b1) zañ ziñ gi mchod pas mi mñes kyi sgrub pa'i mchod pas mñes pa'i phyir ro ||

[3] bcom ldan 'das **ña ñid** sñon **sems can** rnams la **phan 'dogs** par **gyur pa**'i¹⁶⁸ stobs kyis **grub** pa mchog sku gsum gyi go 'phañ '**di ñid brñes pa ste** || sems can (2b2) gyi źiñ sa gśin po la byams sñiñ rje byañ chub kyi sems dañ phyin drug bsdu bzi'i sa bon gruñ po ma btap par don gñis phun tshogs kyi ston thog bzañ źiñ mañ ba 'byuñ bar mi 'gyur ba'i phyir te | *Byañ chub sems 'grel*¹⁶⁹ las |

sems can brten nas sañs rgyas kyi || go 'phañ (2b3) bla med rñed 'gyur na ||

lha dañ mi yi loñs spyod gañ || tshañs dañ dbañ po drag po dañ ||

'jig rten skyoñ bas bsten de dag | sems can phan pa tsam źig gis ||

ma drañs pas ni 'gro gsum 'dir || gañ yañ med la mtshar ci yod ||¹⁷⁰

¹⁶⁶ pa *ego* / ba *sic*

¹⁶⁷ pa *ego* / ba *sic*

¹⁶⁸ pa'i *ego* / ba'i *sic*

¹⁶⁹ *Bodhicittavivarāṇa* by Nāgārjuna.

¹⁷⁰ P no.2665(gi46a6-8), D no.1800(ñi41a6-7), N no.664(gi45a1-2):

sems can bsten pas sañs rgyas kyi (kyis P, N) || go 'phañ ('phañs P, N) bla med ñid 'gyur na ||

lha dañ mi yi loñs spyod gañ || tshañs dañ dbañ po drag po dañ ||

'jig rten skyoñ bas bsten (brten P, N) de dag | sems can phan pa tsam źig gis ||

ma drañs pa ni 'gro gsum 'dir || 'ga' yañ med la mtshar ci yod ||

P no.5470(gi244b8-225a2), D no.4556(筆者未見), N no.3461(gi214a3-4):

sems can brten nas bla med pa'i || sañs rgyas go 'phañ ('phañs P) ñid 'thob na ||

tshañs dbañ drag po 'jig rten skyoñ || la sogs thob pa mtshar ci yod ||

sems can phan pa byas tsam gyis || ma *drañs*(*ego* / drags P, N) lha mi'i loñs spyod de ||

'gro ba gsum po 'di dag na || nam yañ yod pa ma yin no ||

大正 1662, p.543a10-13 (チベット訳とは完全には一致しない):

ces dañ | *sPyod 'jug*¹⁷¹ las kyañ |

sems can rnams dañ rgyal ba las || sañs rgyas chos 'grub 'dra ba la ||

rgyal la gus byed de b'zin du || sems can la min ci yi tshul ||¹⁷²

žes gsuñs pas so ||

sems can kho na'i don du bcom ldan 'das **ña yis** g'zan don loñs (2b5) sprul gyi **sku** gñis po '**di yañ dag** par **bzuñ** ba yin te | g'zan du na dag pa gñis ldan gyi chos sku tsam gyis chog pa'i phyir dañ | sñiñ rje chen po thog mtha' bar gsum du gal che ba'i don yod pa'i phyir ro ||

sems can rnams la yid kyis gnod sems (2b6) pa'i gañ zag **de** ñid rgyu mtshan **gañ gi phyir** || na

bcom ldan 'das **ña la mi bltos pas** te sañs rgyas kyi bstan pa'i khyad chos kyi gtso bo sems can la gnod 'tshe spoñ ba dañ 'gal ba de'i phyir **na** ña ñid gañ zag **de yi don** te skyabs **ston par mi 'gyur** ro ||(3a1)

[4] **sems can** la **phan** 'dogs **pa chuñ** du byas na **yañ** gañ zag **des ni** bcom ldan 'das la **mchod pa** byas pa'i phan yon '**byuñ** bar '**gyur te** || bya ba

gañ gis sañs rgyas kyi **yid** de thugs **ni mgu** (3a2) **bar byed pa** de ni **mchod pa yin pas so** ||

sems can la **gnod pa'i bdag ñid can nam g'zan la rnam par 'tshe ba'añ ruñ** ste |

de ltar byas nas me tog dañ bdug spos la sogs pa mchod rdzas bzañ po **legs par sbyar nas** (3a3) **mchod par gyur kyañ** mchod pa **des ni** sañs rgyas bcom ldan 'das kyi thugs dgyes pa'i **mchod par mi 'gyur** te | sems can la gnod pa'i bya bas | sañs rgyas kyi thugs dgyes par mi 'gyur ba'i phyir te | dper na | sñiñ du sdug pa'i (3a4) bu la gnod pa byas pas | de la byams ba'i ma'i yid mgu bar mi 'gyur ba b'zin no ||

[5] śin tu mdzes pa'i **chuñ ma dag dañ** sñiñ du sdug pa'i **bu dañ** yid du 'oñ ba'i '**byor pa dañ rgyal srid chen po dañ** ||

rañ gi **śa rnams dañ ni khrag dañ tshil dañ** (3a5) **mig dañ lus rnams kyañ** ||

而諸衆生本來無得。隨智差別起種種相。所有梵王帝釋護世天等。若天若人一切不離世間相故。

¹⁷¹ *Bodhisattvacaryāvatāra* by Śāntideva.

¹⁷² sattvebhyaś ca jinebhyaś ca buddha-dharmâgame same | jineṣu gauravaṃ yadvan na sattveṣv iti kaḥ kramaḥ || VI-113 (Vaidya, P. L. (1960) p.110.24-25) sems can rnams dañ rgyal ba las || sañs rgyas chos 'grub 'dra ba la || rgyal la gus bya de b'zin du || sems can la min ci yi tshul ||(P no.5272, la21a7-8; D no.3871, la19a3)

sems can **gañ la brtse ba'i gžan dbañ du byas nas** te soñ nas bcom ldan **ña yis gžan la yoñs su btañ ba** ||

des na sems can **de la gnod pa byas na** bcom ldan 'das **ña** (3a6) **la gnod pa byas** par **'gyur** ba yin no ||

[6] rgyu mtshan **des na** gañ zag gañ **sems can** la **phan pa byas na** bcom ldan 'das **ña la** **mchod** pa byas **pa'i mchog** dañ |

gañ zag gañ **sems can** la **gnod pa byas pa** (3b1) de ni bcom ldan 'das **ña la śin tu gnod pa'i mchog** ste mthar thug yin no ||

bde ba **dañ sdug bsñal** bcom ldan 'das **ña dañ sems can** rnams **mtshuñs par myoñ** ba ste ldan 'dod dañ 'bral 'dod mtshuñs bde **bas na** ||

sems (3b2) **can rnams la** gnod ciñ **'tshe bar byed** pa **de** ni bcom ldan 'das **ña yi slob ma ji ltar yin** te min no || sañs rgyas dañ sems can bde sdug mtshuñs par myoñ žes pa'i don ni | sems can rnams kyis rañ ñid bde ba dañ ldan žiñ sdug bsñal dañ 'bral bar 'dod pa ltar (3b3) sañs rgyas kyis sems can rnams bde ba dañ ldan žiñ sdug bsñal dañ 'bral bar 'dod pa mtshuñs pa'i don yin te | lo tsā¹⁷³ ba Chos kyis šes rab kyis bsgyur las |

ña dañ sems can dag ni bde dañ | sdug bsñal mtshuñs 'dod pas |¹⁷⁴
žes 'byuñ bas so ||

[7] bcom ldan 'das kyis sñon **sems** (3b4) **can rnams la** gnod 'tshe spoñ žiñ byams sñiñ rje bsgoms pa la **brten nas sañs rgyas** kyis thugs **mñes** par byas śiñ | **dge ba** mtha' yas pa rdzogs par **byas** || pa dañ |

sems can mañ po'i don la ste don du byañ chub mchog tu thugs (3b5) bskyed nas | sems can mtha' yas pa la rañ gi lus dañ loñs spyod dge rtsa dañ beas pa gtoñ ba'i blo goms pa dañ | sems can mtha' yas pa la gnod 'tshe spoñ ba'i tshul khriims dañ | sems can gyi log sgrub bzod pa dañ sems can mtha' yas pa'i don la | brtson pa'i (3b6) dka' spyad bzod pa dañ | sems can mtha' yas pa'i don | bya ba'i phyr du mñon par spro ba'i brtson 'grus | gžan don la sems rtse gcig pa'i bsam gtan dañ | sems can mtha' yas pa'i don kha na ma tho ba med par sgrub pa'i tshul rnam par 'byed pa'i šes rab la dus (4a1) yun riñ por **rab tu gnas** pa'i stobs kyis sbyin pa la sogs pa'i **pha rol tu phyin pa drug thob** || pa dañ |

sems can tshad med pa'i **don la brtson pa'i yid** de byams pa tshad med **kyis** lta'i bu'i

¹⁷³ tsā *ego / tstsha sic*

¹⁷⁴ P no.5429, gi151a4.

(4a2) **bdud kyi stobs kyañ bcom** || bar mdzad pa dañ |

sems can rnams la brten nas sñar bśad pa'i sbyin sogs **de lta bu de ltar spyad pa des**
na ste de'i stobs kyis zas gtsañ sras po **ña** mñon par rdzogs par **sañs rgyas** || pa yin no ||

[8] **skye ba skye bar** (4a3) te du mar śin tu **gces par gyur ba'i gñen** gyi mthar thug
tshe 'di'i ma dañ **'dra** bar gyur ba'i **srog chags med** par **gyur na** ||

dños po gañ la skabs **'dir ni sñiñ rje** dañ **byams las** te byams pas **dmigs pa** ste dmigs
nas **ñes par** (4a4) **'grub** || ste 'grub par mi 'gyur ro ||

btañ sñoms dañ **dga' ba** tshad med dañ **la sogs** pa'i sgras bsdu pa byañ chub kyi sems
dañ phyin drug bsdu bži la sogs pa'i rgyal sras kyi lam phal mo che rnams dmigs pa'am
ched du bya ba'i **dños po'i yul** gañ la (4a5) dmigs nas de dag 'grub par 'gyur te mi 'gyur
ba **dañ rnam par thar** ba dañ byañ phyogs so bdun | **la sogs** pa'i thun moñ ba'i lam rnams
kyañ **gañ la** || dmigs pa'am gañ gi don du de dag sgrub pas theg dman las khyad par
du 'phags par (4a6) 'gyur te mi 'gyur žiñ | gañ zag **gañ gi don du sñiñ rje** bskyed nas gžan
don **de la 'bad pa'i yid kyis** dka' spyad dañ du len pa'i **bzod pa yun riñs** por¹⁷⁵ **bsgoms**
bar 'gyur te mi 'gyur ro || ji skad du | *rMi lam yid bžin nor bu'i gtam*¹⁷⁶ las (4b1)

gal te sems can de dag med gyur na ||

'di ni gañ gi ched du sbyin pa gtoñ ||

gal te lus can rnams ni med gyur na ||

gañ las 'dul ba'i tshul khriims thob par 'gyur ||

ñes pa byed pa yañ ni gañ žig yin ||

gañ gi ched du dpa' bo bzod pa bsgoms ||

gañ žig mñon (4b2) par 'dod pa thob bya'i phyir ||

su yi ched du brtson 'grus de de byed ||

gal te lus can rnams ni med 'gyur na ||

ji ltar byams dañ sñiñ rje dga' ba dañ ||

btañ sñoms dag la yañ dag brten nas ni ||

bsam gtan sñoms 'jug bde ba 'thob par 'gyur ||

thar ba bde ba dños dañ (4b3) dños med śes ||

khams dañ bsod nams bag la ñal du brjod ||

kun nas ñon moñs rnam par byañ ba dag |

¹⁷⁵ por *ego* / bor *sic*

¹⁷⁶ *Svapnacintāmañiparikathā* by Nāgārjuna.

gal te de dag med na ji ltar śes ||
 byañ chub phyogs dañ mthun pa'i chos rnams kyi ||
 rgyu ni 'di ltar sems can rnams yin pas ||
 de phyir rdzogs pa'i byañ chub (4b4) 'dod pa yi ||
 sems can rnams ni bla ma bźin du blta ||¹⁷⁷
 źes gsuñs pa ltar ro ||

[9] **glañ po** che dañ rta bzañ po **la sogs pa 'gro ba sems can rnams ñid du ma** thub dbañ
ña yis gźan la phar **sbyin pa** btañ ba **byas** || śiñ |(4b5)

sems can rnams ñid chos kyi **snod ñid du yañ ñe bar gyur pas**¹⁷⁸ te gyur tshe thub
 dbañ **ña yis sbyin pas** tshur **bsdus** || pa dañ |

sems can rnams ñid sna tshogs pa'i rgud pas mnar ba'i **dños por gyur pas**¹⁷⁹ sñon
 thub (4b6) dbañ **ña yis sñiñ rje** śin tu **'phel bar gyur** || pa yin no ||

gal te sems can rnams ñid bsruñ ma byas te skyoñ bar ma mdzad **na gañ gi don du**
don gñis phun tshogs **'di ñid bsgrubs** || te 'grub par mi 'gyur ro ||

[10] **gal te** (5a1) **sems can med na 'khor bar ñon moñs** pa'i kun ñon **mi zad** de drag po
 rnam grañs **rab tu mañ po las** || las kyi kun ñon sna tshogs 'byuñ źiñ |

de las 'gro ba rigs drug gi **skye ba**'i kun ñon 'gyur ba sogs (5a2) **brgyud par** te 'khor
 lo bźin du yañ dañ yañ du 'khor ba'i **gnod pa mtshuñs par** myoñ ba **med las** te med pas
 ched du bya ba **gañ la brten nas phan** bde bla na med pa'i go 'phan **'di ñid bsgrubs** ||
 te 'grub par mi 'gyur ro |

¹⁷⁷ P no.5469(gi220a3-7), D no.4555(筆者未見), N no.3460(gi209b5-210a1), P no.5660(ñe199b3-7)(P'),
 D no.4160(ge165b7-166a3)(D'), N no.3651(ñe195a2-5)(N'):

gal te sems can de dag med gyur na || 'di ni gañ gi ched du sbyin pa gtoñ(stoñ P) ||
 gal te lus can rnams ni med gyur na || gañ las 'dul ba'i tshul khriims thob par 'gyur ||
 ñes pa byed pa yañ ni gañ źig yin || gañ gi ched du dpa' bo bzod pa bsgom(sgom D') ||
 gañ źig mñon par 'dod pa thob bya'i phyir || su yi ched du brtson 'grus de de byed ||
 gal te lus can rnams ni med 'gyur na(ni N) || ji ltar byams dañ sñiñ rje dga' ba dañ ||
 btañ sñoms dag la yañ dag brten nas ni || bsam gtan sñoms 'jug bde ba thob par 'gyur ||
 thar pa(pa'i P', D', N') bde ba dños dañ dños med śes || khams dañ bsam pa bag la ñal du brjod ||
 kun nas ñon moñs rnam par byañ ba dag | gal te de dag med na ji ltar śes ||
 byañ chub phyogs dañ mthun pa'i chos rnams kyi (kyis P', N') || rgyu ni 'di(ji D') ltar sems can rnams
 yin pas(pa P', N' / la D') ||
 de phyir rdzogs pa'i byañ chub 'dod pa yin (yis P', D', N') || sems can rnams ni bla ma bźin du blta (Ita
 D') ||

¹⁷⁸ pas *ego* / bas *sic*

¹⁷⁹ pas *ego* / bas *sic*

bde bar gśegs (5a3) pa bcom ldan 'das **kyi bdag ñid chen po** ste lus can kun gyi mchog tu gyur ba **ño mtshar che** źin rmad du byuñ **ba 'khor ba'i rgyan** du **gyur** ba'i yon tan bsam gyis mi khyab pa **'di** || dag

gal te bcom ldan 'das **ña la sems can rnams la** thugs **brtse** (5a4) ba **med** par **gyur na** ched du bya ba **gañ gi don du ñe bar bsgrubs** || te 'grub par mi 'gyur ro | de'i phyir sañs rgyas byañ sems kyi bzañ po spyod pa'i yon tan phul du 'byuñ źin dpag par dka' ba rnams sems can la rten nas 'byuñ ba śa stag yin pas | blo gros dañ ldan (5a5) pa rnams kyis sems can gyi źin la ches śin tu gces spras su 'dzin dgos pa'i tshul la ñes pa brtan po bskyed par bya'o ||

[11] **ji srid** du thub dbań **ña yi bstan pa 'gro ba** mtha' yas pa **rnams la phan** bde dpag tu med **pa** ster bar byed pa 'di ñid 'jig rten gyi khams **'dir** (5a6) **ni 'bar** bar **gyur pa** ||

de srid du **gźan** sems can rnams **la mchog tu phan par 'dod pa'**i ñan thos chen po **khyed** rañ rnams **kyis** źi ba'i dbyiñs su mi bźugs par **gnas par gyis** || śig ces pa'o || Chos kyi śes rab kyi bsgyur ltar na

bdag (5b1) gźan mñam par gnas par bśad do ||

mdo sde mañ po **thos pas** bcom ldan 'das **ña yi legs par spyad pa** ste skyes rabs mañ po'i kun bzañ spyod pa **sams can** gyi **don la** nam yañ **mi skyo** ba rnams legs par **thos** nas ñes par **bgyid la** ||

sams (5b2) can gyi don la **skyo ba** dañ ñal ba **med par** chu śin dañ dbu ba lta bu'i sñiñ po med pa'i **lus 'di las ni** lhun po lta bu'i **sñiñ po** dam pa **dag ni blañ bar gyis** || śig |

ces **Byañ chub** sems dpa'i sde snod **Ba tshva'i chu kluñ źes bya ba'i luñ las** (5b3) bcom ldan 'das kyis ñan thos chen po bcu drug la **bka' stsal pa** | **Sams can mgu bar bya ba'i bstod pa slob dpon Klu sgrub** kyis tshigs su bcad pa'i sgo nas bsdus pa **rdzogs so** || || (5b4) **rgya gar gyi mkhan po Pa ñdi ta chen po Dī pañ ka ra śrī dzñā** na ste dPal mar me mdzad ye śes dañ | **lo tsā ba dge sloñ Tshul khirms rgyal bas**¹⁸⁰ **bsgyur ciñ źus te gtan la phab pa'o** || | ||

¹⁸⁰ bas *ego* / pas *sic*

'dir 'bad dge (5b5) tshogs¹⁸¹ rluñ gis rab bskyod pa'i ||
man ñag rgyu 'bras bdun gyi grur žugs¹⁸² nas ||
sku gsum rin chen gliñ du phyin gyur te ||
skyes dgu'i re ba ma lus skoñ bar śog | ||(5b6)

ces *Sems can mgu bar bya ba'i tshigs bcad* la bsgyur mi 'dra ba gñis yod pa las | Nag tsho'i
bsgyur gyi steñ nas mchan gyis tshig don cuñ zad rnam par phye ba 'di ni | spoñ ba (6a1)
ba'i gzugs brñan [a mark of reverence] sbrañ btsun Ñag dbañ dpal ldan gyis | rab byuñ bcu
bži pa'i 'grañ bya bži bcu rtsa bži pa thun moñ žes pa lcags pho khyi lo'i cho 'phrul gyi zla
ba'i dus su | Khu (6a2) khen hu thog thu'i khu re Dam chos 'gyur med gliñ du mtshams¹⁸³
bcad skabs sbyar ba 'dis kyañ bstan 'gro la phan thogs par gyur cig | || || dge'o ||

割注付きの『命あるものを喜ばせる偈頌』が収められる。¹⁸⁴

師に礼拝します。

あらゆる命あるものに対し一人息子のように慈しむ、
弟子を伴ったブッダに礼拝して、
『命あるものを喜ばせる偈頌』という
ことばの意味のままの名前(題名)によって分析しよう。

[1] さて、仏であり世尊である「私に対する敬意」によって供養を望むものたちは、「命あるもの」[へ]の「利益」をなす必要がある。命あるものに対し、慈愛によって利益をもたらすことが私の心を喜ばせる最高のものであるように、物質的な供え物などの「他の諸々の敬意」は同様「ではない。」のだから。

命あるものに対する「慈悲を投げ出さない、そうした者が」、世尊である「私に対して敬意を払う」ことによって供養をなすのが最高な「のである。」その者が私の心を喜ばせることが最高であるからである。

「慈悲」の意欲を投げ出して、静寂という極端に「とどまってしまい」、劣った乗り物(Hīnayāna, 小乗)に「墮ちている [そのような] 者は」、小[乗]に墮ちた

¹⁸¹ tshogs ego / chogs sic

¹⁸² žugs ego / bžugs sic

¹⁸³ mtshams ego / 'tshams sic

¹⁸⁴ 翻訳に際してツルティム・ケサン大谷大学名誉教授から貴重なご指摘を多くいただいた。ここに記し感謝に代えたい。ただし試訳中に誤りなど不備があればそれはすべて筆者の責任である。

「そこから慈悲」 [への] 意欲に「よって [救い] 上げられるけれど」、「他の」手段「で」 [救い] 上げられること「はない。」のである。母が智慧であり、父が手段である。それゆえ、自我は存在しないこと(無我)を理解する知などの智慧の諸要素は、三乗に共通するものであるから。

[2] 「その人の慈悲が命あるもの」たち「に結びついているような、その人によって」、世尊である「私もまた喜ばせられ」、「その」人「によって」仏の「教えの重さ」が大きいこと「もまた」よく「捉えられる」のである。仏によって命あるものたちは非常に愛しいものとして捉えられ、そして仏の教えは慈悲によって広く開かれる。[教えは] 慈悲を根本にもっているものだから。

諸々の「徳性」や多くの「学問」や生じる「諸々の慈悲や」、聖典の言葉の意味で理解しがたい諸々に入る(通じる) 深い「知恵と」、諸々のものごと(*dharma) の最も微細な部分の諸々を区別することのできる智慧の「明晰さ」が

「その人」の性質(*saṃtāna, 相続性)「にあるようなその人によって、いつ」の時「も善逝」たち「は供養される」のである。仏たちは物質的な供え物の供養によっては喜ばない、ということに達した供養によって、喜ぶのだから。

[3] 世尊である「私は」以前「命あるもの」たちに「利益を生じさせる」力「によって」まさに「この」三身の境地という最高の「達成を得た。」命あるものという不毛な土地に、慈愛 [と] 慈悲 [と] さとりの心(*bodhicitta, 菩提心) と6 つの完成(*śaḍpāramitā, 六波羅蜜) と4 つの集まり(*catuḥsaṃgraha, 四摂事) という生命力の強い種を植えないと、2 つの対象(命あるものと不毛な土地) は完成、つまり収穫が良いもので大量になる、ということはないのだから。Bodhicittavivaraṇa¹⁸⁵に、命あるものに依存して仏というこの上ない境地が得られるのなら、天や人を享受する [者で] 梵 [天] や主宰 [神] やRudra [天] といった、世間の庇護者によって依存されるところの彼らで、命あるものを利益することだけによって未だ導かれていない者が、この三界に誰も存在しないことに対してどんな驚きがあろうか。

と [あり]、またBodhicaryāvatāra にも、命あるものたち [からでも] 勝利者(仏) [たち] から [でも] ブッダの教えの到来は同じで [価値が] あるので、勝利者 [たち] に敬意を払うのと同様に命あるもの [たち] に [敬意を払うべきであり、払わ] ないということがどうし

¹⁸⁵ 酒井真典(1988) pp.124.15-125.1, 126.8-11 に、2 つのチベット訳(P nos.2665, 5470) に対するそれぞれの和訳がある。

てあろうか。

とお説きになったので。

「まさに命あるもののために」世尊である「私は」、異なる意味 [をもつ] 報と化の2つの「この身体を現した」のである。そうでなければ清浄な2つ(報身と化身)をもった単なる法身で十分であるから。また、大慈悲は始めと終わりとの中間の三時に(常に)非常に重要な意義 [をもつ] からである。

「命あるものたちに対し心で傷つける心 [をもった]、そのような」性質の人「はどうして [そうなるのか] 」といえ、世尊である「私に依存しないから」である。つまり、仏の教えの [うち] 特に教えの根本は、命あるものを傷つけ害することから離れ、 [それとは] 相容れない。それゆえ、 [私に依存しない] 「ならば」、私自身が「そ」の人「を利益すること」つまり庇護すること「を説くことはない」のである。

[4] 「命あるもの」に対する「利益が小さく」なされたとし「ても」、「その」人「によって」仏に対して「供養」をなすことの利益「が生じることになる」という、

「それによって」仏の「心」つまり気持ち「が喜ばされる」ところのそれが、「供養であるのだから。」

命あるものに対し「傷つけるという本性をもって、あるいは他のものを傷つけて [おいて]」、そのようになしてから、花と香などのすばらしい供物 [で] 「作為的に供養したとしても」、供養する「その人が」仏である世尊の心を喜ばせる「供養をすることにはならない」のである。命あるものを傷つけることをなすことによって、仏の心を喜ばせることにはならないから。例えば、かわいい息子を傷つけることによって、彼を愛する母親の心が喜ぶことはないのと同様である。

[5] とても美しい「妻たちと」かわいい「息子と」、魅力的な「富と大王国と」自らの「肉と血と骨髓と眼と身体」という、

命あるものが「執着するところ」のその他のもの「に関して」つまり関連しては、世尊である「私は」他に対して「捨ててしまった。

それゆえ彼 [ら] 」命あるもの「を傷つけるならば」、世尊である「私を傷つけることになる」のである。

[6] 「その」理由「で」、ある人が「命あるもの」に「利益をなすならば」、世尊である「私に供養」をなすこと「は最大であり」そして、

ある人が「命あるもの」を「傷つける」というそのことは、世尊である「私に対

する軽蔑は最大である」つまり究極である。

「幸せと苦しみを」世尊である「私と命あるもの」たち「は同じように感じる」つまり「命あるものが幸せを」つかむことを望み「苦しみから」離れることを望むのは共通の幸せである「のだから、

命あるものたちに対し」傷つけ「害する[ような]その者が」、世尊である「私の弟子でどうしてあろうか」、[いや]ない。仏と命あるものは幸せと苦しみを同じように感じる、という意味は、命あるものたちが自分自身で幸せをつかみ苦しみから離れることを望むのと同様に、仏が、命あるものたちが幸せをつかみ苦しみから離れることを望むのが、同じである、という意味である。翻訳者 Chos kyi śes rab の翻訳(P no.5429)では、

私と命あるものたちは、幸せと苦しみを同じように考えるのだから。
とあるので。

[7] 世尊は以前、「命あるものに対して」傷つけ害することを離れ、慈愛[と]慈悲を修習することに「依って、仏」の心「を喜ばせ」、「善を」無限に完成することを「なした。」そして、

「多くの命あるもののために」つまり「彼らの」ために、最高のさとり的心を生じてから、無量の命あるものに対し、自らの身体と享受した善の根本をもって分け与える心に習熟すること(布施)と、無量の命あるものに対し傷つけ害することを離れた規律[をもつこと](持戒)と、命あるものの悪意に耐えることと無量の命あるもののために努力することのなし難さに耐えること(忍辱)と、無量の命あるもの利益をなすために、熱心に努力すること(精進)[と]、他のために一点に集中する心で瞑想すること(禅定)と、無量の命あるもののため[に]罪のないことに達するあり方を見分ける智慧に、長い間とどまった力によって、「これら」布施などの6つの「完成(*pāramitā, 到彼岸)を得た。」そして、

量り知れない「命あるもの」の「ために努力する心」つまり量り知れない慈悲「によって」Devaputra という「魔天(*māra)の力をも制圧」なされた。そして、

「命あるものたちに」依って、先に説いた布施などの「これ」[ら6つ]「をその通りに実行する。それゆえ」つまりその力によって、Śuddhodana(浄飯王)の息子である「私は」ありありと完全に「悟った」のである。

[8] 「次々に生まれ」つまり多く、非常に「愛しくなった友」の究極である、この世の母「のように」なった「生き物が存在しないのならば、

どんなものにおいてこの」時「に、慈悲」や「慈愛が」つまり慈しみをもって、

「抛り所とされ」つまり抛り所とされた後に、「確立されようか。」、[いや] 確立されることはない。

「平常心」や量り知れない「喜びなど」のことばによって省略される、さとり[を求め] 心(*bodhicitta) や6つの完成(*śaḍḍpāramitā) や4つの集まり(*catuḥ-saṃgraha)などの、勝利者の息子(*jinaputra, 菩薩)の道という、ほとんどの人が抛り所とするか、あるいは目的とする「ものごとの対象」、それに依ってそれらを確立するだろうか、[いやそんなことは] ない。「そして解脱」や37のさとりへの要素(三十七道品,*bodhipakṣa)「など」の諸々の一般的な道もまた、「どこに」依ってあるいはどんな対象において、それらを完成させるために小乗よりも優れているのだろうか、[いやそんなことは] ない。

「どんな」人を「対象とした慈悲」を生じて、他のため[に]「それに努力する心によって」行い難いことを受け容れる「忍耐を長い間生じる」ことがあろうか、[いやそんなことは] ない。次のように、*Svapnacintāmaṇiparikathā* に、

もしこれら命あるものたちがいなければ、この者は誰のために布施を出すのか。もし身体をもつものたちがいなければ、誰から統制する規律(戒)を得ようか。悪事をなすことも誰が[なすの] だろうか。誰のために勇者[の] 忍耐を身につけるのか。誰が欲しいものを得るために、[あるいは] 誰のためにあれこれ努力するのか。

もし身体をもつものたちがいなければ、どうして慈愛(慈)と慈悲(悲)[と] 喜び(喜)と平常心(捨)に正しく依って、精神集中し心を静め、幸せを得るだろうか。解脱の幸せは、ものごととものごとでないものを知り、[認識の] 要素(*dhātu, 十八界)や福德[や] 感情の中の眠り(*anuśaya, 随眠)について説き、煩悩を完全に浄化する(取り除く)ことの諸々である。もし彼らがいなければどのようにして知ろうか。

さとりへの要素(*bodhipakṣa, 三十七道品)に相当する諸要素の動機は、このように命あるものたちであるから。それゆえ完全なさとりを願う命あるものたちは、ラマ(lama, 師僧)のようだとみられる。

とお説きになられたように。

[9] 大きな「象」や美しい馬「などの生き物[や] 命あるものたちは何度も」賢者の主(*Minīndra)である「私によって」、他に対して、そちらに「贈り物」を与えること「がなされた。」そして、

「他ならぬ命あるものたちは」教え(*dharma)[を理解する]「器に到れば」つま

り [そう] になった時、賢者の主である「私によって贈り物が」こちらに「集められる。」そして、

「他ならぬ命あるものたちは、さまざまな」力によって悩まされる「存在になるため」、以前、賢者の主である「私による慈悲が」非常に「増した。」のである。

「もし他ならぬ命あるものたちを [私が] 見守らない」つまり [ブッダが] 守ることをなされない「ならば、何のために」2 つを完成させる「この利益が達成されようか」、[いや] 達成されることはない。

[10] 「もし命あるものが存在しないなら、輪廻において苦しみ」という煩惱「[や] 耐え難いこと」つまり乱暴 [されること] の同義語であるが—「が多いことから」行為についてさまざまな煩惱が生じ、

そこから6種の存在形態 [へ] の「生まれ」の煩惱が生じるなど [の] 「回転における」つまり車輪のように次々に回ること [において] 「傷つくこと [があるけれど、それ] は同様に」経験されることが「ないから」つまり存在しないのだから、[そういう] 理由 [で]、「何に依存して」この上ない喜びの境地という「この利益が達成されようか。」、[いや] 達成されることはない。

「善逝」つまり世尊「の偉大な性質であり」つまり身体をもつあらゆるものの中で最高となった、「たいへん驚くべきものである」つまり驚異的な、「輪廻の莊嚴となっている」ところの [われわれの] 思慮の及ばない特質が「これ」らである。

「もし」世尊である「私の中で命あるものたちに対して愛しいという」心「がないならば」、[そういう] 理由 [の場合]、「何のために [彼らに] 近づくのか。」、[いやそう] なることはない。それゆえ、仏 [や] 菩薩の善い行いの徳は最高であり、量り難いものであって、命あるものに依って生じるものがすべてであるので、知恵をもった者たちは命あるものの世界において、極めて大きな尊敬をもって捉えられるためのやり方で、確実さや安定性を生じるべきである。

[11] 「次のように」、賢者の主である「私の教えが」、数えきれない「世界の万象に対する」量り知れない「利益」や幸せを与えることをなす [という] まさにこのことが、世間の領域(*lokadhātu, 世界) という「ここで燃える、

その限り、他」の命あるものたち「に対して最高の利益を願う」、偉大な修行者(*śrāvaka)である「あなた」方自身「が」、静寂な領域(さとの世界)にとどまらないで、[この世間に]「とどまりますように。」ということである。Chos kyi śes rab の翻訳(P no.5429)の通りであれば、

[他人に対して最高の利益を] 自他に等しく立て [なさい]

と説かれる。

多くの経典を「聴いて」、世尊である「私の善い行いが」つまり多くの「これまでの」連なった生涯(**jātaka*, 前生)のあらゆる善い行いが、「命あるもの」の「ために」、常に「疲れることなく」よく「聴か」されて、確立「されるとき、」命あるもののために「疲れること」や倦怠感「はなく」、バナナの木や泡のように中核のない「この身体から」、須弥山(**Sumeru*)のような最高の「諸々の中核を得ますように。」

以上、「菩薩蔵『塩の河』という経典から、世尊が16人の大声聞たちにお話しになった、『命あるものを喜ばせる讃歌』という、師 *Nāgārjuna* が偈頌の形でまとめられたものを終わる。インドの大学者 *Dīpaṃkaraśrījñāna*」つまり、吉祥な、灯火で照らす「ような」知恵をもった方「と、翻訳僧 *Tshul khriṃs rgyal ba* によって翻訳され修正されて、確立された。」

ここで努力した(割注を著した)「ことによって得られた」善の集まりの風で動く、「口伝の7因果」¹⁸⁶の船に入ってから、三身「を獲得する」という宝の島へ到った。

多くの人の望みが残りなく満たされますように。

以上、『命あるものを喜ばせる偈頌』には異なる2つの翻訳が存在するから、*Nag tsho* [*Tshul khriṃs rgyal ba*] の翻訳(P no.2017)の上から割注によって、言葉の意味を少し詳しく「解説」したこれは、世捨て人の姿をした放浪者である、尊者 *Ñag dbaṅ dpal ldan* によって、第14丁卯年¹⁸⁷から数えて第44年目である庚戌年(1850年)の神変月(1月)に、「モンゴル名」フーヘン・ホトクトの寺院、「チベット名」正しい教えが変わらない島(寺院)で、隔離行(*bsñen mtshams*, 人と会わない修行)をしたときに著したこれ(この著作)によっても、「仏教の」教え「や」世界の万象(**jagat*)に利益が生じますように。幸あれ(**śubham*)。

¹⁸⁶ *Tsoñ kha pa* の *Lam rim chen mo* や *Lam rim chuñ ba* に説かれる、「勝れた思惟(*lhag bsam*, 増上心)」、「慈悲(*sñiñ rje*, 悲)」、「慈しみ(*byams pa*, 慈)」、「恩に報いる(*drin du gzo ba*, 報恩)」、「恩を思い起こす(*drin dran pa*, 念恩)」、「母だとみること(*mar mthoñ ba*)」の6つを修習(*bsgom pa*)することにより、「さとりを求める心(*byañ chub kyi sems*, 菩提心)」という成果を得る、という7因果のこと。Tsultrim Kelsang Khangkar (2001) p.11.18-23, ツルティム・ケサン, 小谷信千代(1991) p.57.2-6; ツルティム・ケサン, 藤仲孝司(2005) p.162.9-18.

¹⁸⁷ 1027年がチベット暦元年で、第1の丁卯年にあたる。1周期は60年で、第14周期は1807年から。

京都大学大学院修了
Ex-Graduate Student,
Kyoto University
Kyoto, Japan